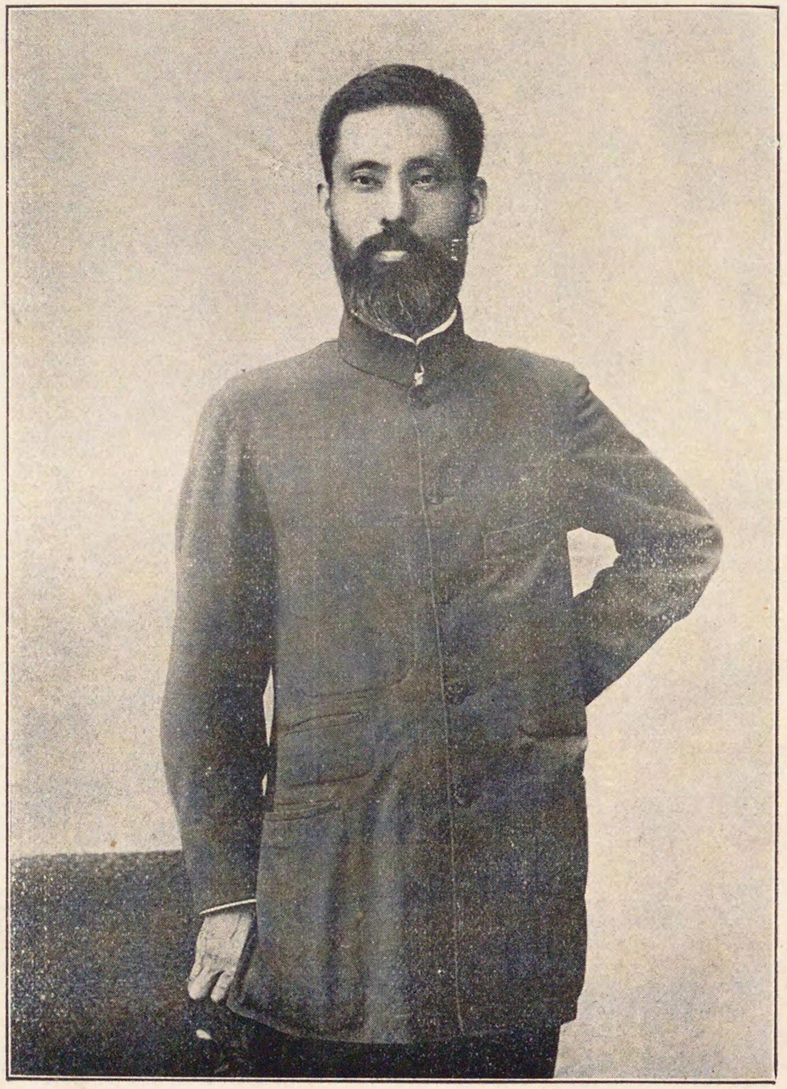
DM283-J5
1200900363014

農家経濟要義

農家経済要義

DM283-J5



講師
山崎延吉君

I種
W
1200900363014

序

農家窮乏の聲は年を逐ふて喧しく、農家の浮き腰となる者日を重ぬるに從ふて多くなり行くは、爲政家、經世家の倶に憂慮する所なり、而も農家の經濟狀態を良好にするは、其救濟策と認められながら、未だ農家に經濟の思想普及せず、經濟の手腕發達せざるは、眞に遺憾の事なりとす、靜岡縣磐田郡農會茲に見る所あり、農家經濟の講習會を開催す、誠に機宜を得たるものとすべし、而して吾輩講師の嘱託を受く、素より當らずと雖も、吾亦多年茲に考慮工夫する所あり、即ち

敢て其要項を講演せり、日數の短きこと、時間の少きこと、加ふるに材料豊富ならずして、其叙說思ふ儘なるを得ざりしは、自らも快しとせざる所なれども、之れが爲め多少なりとも主催者の目的に適ふ所あるを信じて疑はず、讀者夫れ幸に之れを諒し、研究事に勤め、工夫して倦むなければ、必ずや發明する所多かるべし、吾輩切に之れを祈りて序に代ふること云爾。

大正二年春

安城寓居

我農生　山崎延吉

農家經濟要義目次

第一章　農家經濟の現狀……一
　第一節　自作農家の經濟狀態……一
　第二節　小作農家の經濟狀態……五
　附　農家經濟の將來……六
第二章　農家經濟の區分……十
　第一節　收入の區分……十一
　第二節　支出の區分……十五
第三章　農家經濟を順調にすべき方法……二十一
　第一節　收入を增加せしむべき方法……二十一
　第二節　支出を減少せしむべき方法……九十九

第四章　農家經濟に關し注意すべき要点……百卅四
第一節　念頭に置くべき二様の區分……百卅四
第二節　勤倹の眞意義を解すべきこと……百卅九
第三節　報酬に對し悟りを啓くべきこと……百六十六
第四節　記帳勘定決算を大切に思ふべきこと……百七十六
第五節　家長と主婦と同一意見なるべきこと……百七十八
第六節　貯蓄心を涵養すべきこと……百七十九
第七節　收支に確固たる目的あるべきこと……百八十
第五章　經濟の根本義……百八十六
第一節　經濟は道徳を基礎としては立たねばならぬ……百八十六
第二節　經濟は地方改良と離れてはならぬ……百八十八
第三節　經濟は畢竟人類向上の手段であらねばならぬ……百九十六

農家經濟要義

農學士　山崎延吉君述

第一章　農家經濟の現狀

私は此章に於て現在農家の經濟は如何いふ有樣になつて居るかといふ事、及び進んでは今後農家の經濟は如何になるべきかといふ事の概略を話して見たいと思ふ。

惟ふに農家の經濟の現狀を知るに就ては農家の收入及支出の有樣を示すが一番早判りであるから、私は茲に最近二十ケ年間に於ける農家の收支率をお話して見たいと思ふ。

第一節　自作農家の經濟狀態

第一には自作農の收支率で即ち左の通りである、

年次	收入率	支出率
明治二十三年	一〇〇	一〇〇
同　三十二年	一五四	一五五
同　四十一年	二〇七	二一八

此數字は明治二十三年の收支を假りに一〇〇としてゐれから十年目十年目の增加率を示したものである、諸君の家に就て各々調査されても大体之れに似通つたものになるであろうと思ふ、即ち收入に於て此二十年間に倍以上の增加を示して居る、之れは甚だ結構な事である けれとも飜つて支出の增加率を見ると之れも亦年々歲々增加して居る、而も其率は收入の增加率よりも大きいので言ひ換へれば收入も增加はして居るが支出の增加は更に大きいのである、而して之れが我日本全体の農家而も自作農の收支の狀態てあるのである、靜岡縣の事は

私は知らぬけれども我愛知縣の摸樣をお話しすると、三河部で村柄の良い所の自作農の收支增加率が次の樣である、

年次	收入率	支出率
明治二十三年	一〇〇	一〇〇
同　三十二年	一八八	一六〇
同　四十一年	三〇七	三一六
同　四十四年	三五二	三九八

即ち二十餘年間に三倍半の收支增加で農家に取り大邊結構な事であるが三十二年に收支相償つたのみで四十一年となつては遂に收入率を越へ最近の四十四年に至つては遙かに收入率を凌駕したのである、之に依て見ても收入の增加よりも支出の增加の趨勢が激烈である事が明瞭である、更に尾張部に就て見るに、

年次	收入率	支出率
明治二十三年	一〇〇	一〇〇

同　三十二年　一六五　一七二
明治四十一年　二五八　二八九
同　四十四年　三一七　三八〇

右の様である。

斯く自作農家の收支の有様は之を日本全國の上から見ても、亦之れを愛知縣の二ケ國の上から見ても收入が年一年と增加する事實があるので實に結構であるが、支出の增加は年々歳々に激しくなり殊に近頃に於て益々收入より支出の增加が激烈となる有様である。

此の趨勢から考へて見ると今後も亦年々歳々に收入よりも支出の增加が激しくなるものと推斷せなければなるまいと思ふ、されで此收入よりも支出の多い事が即ち現在の様に農家の經濟を不如意ならしめるので、之れが若し反對に支出よりも收入の方が多ければ農家の經濟は期せずして順調に向ふのである。然るに毎に以上の様な案配では結局收支償ふて足らなくなるは火を見るよりも明かであるのである。

第二節　小作農家の經濟狀態

次に小作農の收支率に就て調べても結果は又同し様である、即ち

年次	收入率	支出率
明治二十三年	一〇〇	一〇〇
同　三十二年	一四七	一四七
同　四十一年	一九四	一九七

といふ有様で小作農に於ても年々歳々其收入は增加するが支出の增加は之れ又收入の增加より大きいのである。

要するに之れ等の事柄は全國の農業者の全体が年を逐ふて收入を增して居るけれとも其支出の增加の程度は更に〳〵激甚であること

を證明するもので、全國農家經濟の現狀が甚だ宜敷くない事を意味するのである。

附　農家經濟の將來

更に現今の農村を眺めて見ると農村には年々歳々疲弊の聲が高まつて來て居る、之れ私共が常に大に遺憾に思ふ所で經世家の正に智慧を絞るべき秋である、明治の末世に於て商業は非常に盛になつた、工業も亦長足の進歩をした、從つて都會は日々夜々に繁昌して來たに引き代へて農村の疲弊は次第々々に激しくなつたのである、而して農村に關して今迄見た事もなかつた忌はしい文字が新聞や雜誌に現はれる樣になつて、甚たしきは農村の滅亡など叫ふものもあるのである、其の斯くなれるは所謂收入と支出との增加率が前に述ぶる樣に調和せず差引不足するからの事で此不足を生ずる結果は如何に成り行くかと

いふに、即ち收入に對して支出が多いのであるから其爲に生する所の不足を補充する爲には各農家は順序として先づ第一に遺産の喰込みをやる樣になるが普通であると思ふ、何となれば不足と云て其儘濟まされる譯のものではないから、父祖傳來の遺産のある者は其不足を充足する爲め先づ此方法によるが多い、若し然らざれば預金貯金の引出しで、それも無い人は如何するかといふに遂に止むを得ぬから借金と出かけるのである、借金も未だ借りる顏があり貸して呉れる人が有れば良いけれども、それもなひ人になると今度は三十六計の奥の手を出して逃亡といふ段取りになるのである、この邊には逃げる人は少い樣であるが東北地方奥羽六縣には仲々澤山あるさうである、所で逃げる事はイヤだといふ人は如何するかと云ふに之は又圖太くも橫領詐僞盜賊と成り下るので、それも出來ぬ人は最後に遂に往生するのが先以

て當然の節道で、幕の進展は此六通りに初めからチヤンと決まつて居るのである。

聞けば磐田郡では負債農家一戸當平均額九十圓餘の借金があるとの事であるが、之等はまだ〳〵少ない方で三重縣等は二百五十圓餘も借金があり、東北地方になると尚之れよりも多いとの事である、斯ういふ悲しむべき事柄が農家に於ける實狀として現はれて來たので年一年と其程度が甚だしくなつて來るのであるから、今日の農家は實に累卵の狀態にあるので今の內に何とか考究するでないならばお互農家の將來は愉快に暮すことは出來ない事になろうと思ふ、所が悲しい事には所謂盲人蛇に怖ぢずの譬に洩れず今の農業者は經濟に就ての考へがないのである、第一に先づ各農家が帳面を備へて收支を記載する位の事は是非やつて貰ひたいと思ふ、尤も收支が判らぬから百姓は出

來るので、若し收支が明細に判つたら百姓はせまいといふ人もある、先年長野縣の或報德社で經濟調査をやりかけた所がドノ家を調べて見ても勘定が合つて居らない、收支差引すると損が立つて居る、乃でこれを人に見せたなら大方百姓をする者は無くなるだろうといふので遂に經濟調査を中止したといふ事である、兎も角も農家が百姓をやつて居ながら其收支が如何なつて居るかといふ事位知つて居らぬ樣では貧乏する事請合で貧乏してから騷き出すのは既に遲いのであるから今の內に各農家の經濟を順調にする事に就て大に研究するでなかつたならば恐らくは末の見込がない事になるであろうと思ふ。

現今農村の五惡と唱へらるゝ

▲熱病▲　土地熱、投機熱、都會熱、政治熱、權利熱等、

轉▲業▲　小賣商、土方、人足、金貸、才取等に轉する、
奢▲侈▲　虛榮に憧がれて無理をする、
無▲智▲　改良を好まず、選擧權の行使を知らず、借金を恐れず、經濟を辨へず、迷信なる、
道▲樂▲　勞働を嫌ふ、

の風潮が知らず〳〵流布するのも、畢竟經濟狀態が面白からぬ所から生ずるのであれば、經濟を順調にするは正に目下の急務である。

第二章　農家經濟の區分

農家經濟の區分を學術的にお話すると甚だ六ケ敷なるから、さういふ方面の事は一切避けて云はない事にする、元來農家の經濟は收支相償ふて餘りありといふ事になればうれで良いので、さうなれば財產は獨り手に出來るのである。

第一節　收入の區分

收入には如何なる區分があるかといふに大別して四通りある、即ち一、生產收入、二、財產收入、三、勤勞收入、四、雜收入、即ち之れで我々お互は收入の增加を圖るには此四通りの增加を心懸けるが大切である、尚參考の爲め細別して見ると、

一、生產收入

イ、田作收入（一毛作、二毛作收入）
ロ、畑作收入（麥、豆等普通畑作收入）
ハ、園地收入（茶、桑、果樹、蔬菜等の收入）
ニ、山林收入（木材、薪炭、草刈、茸等の收入）

ホ、副業收入（所により種類を異にすれども養蠶、鷄、養魚、竹、筍、農産製造、飼畜、藁細工、屋敷廻りの果樹等より得る收入）

ヘ、雜收入（雜木の枝を伐りての炭燒、桑の刈株にての炭燒、煉瓦の土賣却等より得る收入）

後に詳說はするが農家は此生産收入に努力して之を增すことにせなければならぬ。

二、財産收入

イ、土地收入（小作料、地代）

ロ、家屋收入（屋賃、部屋料、店貸料）

ハ、公債收入（利子）

ニ、株券收入（配當）

ホ、預金貯金收入（利子）

ヘ、貸金收入（利子）

ト、權利收入（これは新たな財産で形はないけれども確かに一種の財産である、地上權や入會權なども之れで、種類により利子又は配當が得られるのである）

チ、其他（組合の配當等）

財産は只持つてるだけでは面白くないので之れから利益を上ける工風が肝心である、之れで財産收入は所によりて大邊に違ふもので都會に行くと今では婚禮の仕度道具を賃貸して商賣とする者がある、即ち婚禮があると箪笥長持は勿論其中へ入れる衣類迄も日限を限つて一日幾何で貸せるのである、實に便利な世の中となつたので東京などには又燕尾服やシルクハットなどの禮服を貸して金を取る商賣もあり其他種々の財産貸出による收入もあるけれとも普通農家の財産收入は先づ前述べた樣なものであろう。

三、勤勞收入

イ、勞働賃銀（小作人、勞働者、傭人等の得るもの）
ロ、勤勞報酬（官吏、教員等の月俸加俸等）
ハ、料金（辨護士の鑑定料、醫士の診察料、文士の原稿料等）
ニ、年金（軍人や官吏などの貰ふもの）

之れ等は皆勤勞收入である我々は自分の勤勞に依つて此等收入を得るものであるから之れを得る事及增す事を考へる事が又必要である。

四、雜收入

イ、賣却金（新聞雜誌其他反古類賣却代）
ロ、賞金（年末賞與、精農者賞金、品評會等の賞與）
ハ、寄贈物（歲末、年始、中元等の贈られもの等）
ニ、應酬（嫁の世話して鯛を貰ふの類）

即ち生產收入でもなく財產收入でもなくさりとて勤勞收入でもないものを總括して雜收入といふのである。

第二節　支出の區分

支出にも亦四通りの區分がある、即ち一、生產費、二、家事費、三、公益費、四、負担之れで更に細別すれば次の様になる。

一、生產費

イ、種苗代
ロ、土地整理改良費
ハ、賃銀

ニ、肥料代
ホ、飼料代
ヘ、農具、器械、器具費
ト、荷造り原料費
チ、荷造り費
リ、病虫害驅除豫防費
ヌ、運搬費
ル、倉敷料（保管料）
ヲ、管理費
ワ、修繕費
カ、償還費
ヨ、其他

此外是非付け加へたいのは租稅其他の諸掛りであるが今は便宜上他に擧げることにする、但之れは普通なれは生產費に入るべきであることを思はなければならぬ。

兎も角此生產費は此の如く費目が多いから動もすると費用が嵩み易いので塲合により大損を被り勝ちのものであるから大に注意を加へなければならぬ。

二、家事費

イ、住宅費（宅地庭園を含む）
ロ、飲食費
ハ、薪炭費（油、燐寸、電燈等を含む）
ニ、被服費
ホ、什器費（鍋、釜、茶碗、箪笥、長持、軸物等を含む）
ヘ、敎育費（自己及子女の修養、敎育費）
ト、交際費（進物、通信、饗應、宴會等）

チ、娯樂費（玩具、寄席等）

リ、雜費（理髮、結髮、洗濯賃、風呂代等）

ヌ、臨時費（冠婚葬祭、旅行、醫藥費等）

ル、債務（借金のある人に限る）

此家事費は一家を持てば必ず要する所のもので、此項目の分け方は人に依てマチ〳〵で比較研究に不便があつたが、昨年來帝國農會で種々協議の結果以上の項目に決定した、只私は茲には諸掛りを態と拔いた、之れは他で說明するからである。

要するに一家に於ては多少に拘はらず以上の各費用が必ず要るので面倒臭ひ樣ではあるが此項目が判つて居らぬと何れの費目で儉約すべきかといふ事が判らぬ樣になつて、儉約の見當が付かなくなるから名々に於てよく明かにして置く必要があるのである。

三、公益費

イ、社寺費

世界に無くて日本にのみあるものはお宮である、これ等を維持するは誠に必要な事で、自分〳〵にはそれ程の事はないが社會を益する上に極めて緊要である、

ロ、義務費

赤十字社費、愛國婦人會費、海員救濟會費、濟生會費なとで、これもお互の爲にそれ程必要とも思へぬが國民として社會國家の爲め支出するを必要とするのである、

ハ、寄附

青年會、巡回文庫、其他への寄付で金を出すのは勿論、土地勞力等を寄付するものをも含むのである、

四、負擔

此費目は分外に出すことを強ひはせぬが、而し應分の事は何時でも支出が出來る樣にして置きたいものである。

其一、租　稅

イ、國　稅（地租「田租、畑租、郡村宅地租、雜地稅」及所得稅「現行法にて年四百圓以上の所得ある人の出すべきもの）

ロ、縣　稅（此外特別の人ならば營業稅なども要す）

ハ、村　稅（地租割、戶數割、雜種稅、所得稅付加稅）

（地價割、戶別割、反別割、所得稅割）

以上は年々歲々決まり切つて負担を要するものであるが、尙此外に一生涯に一度とか或は時々に出さねばならぬ一時的の稅金がある、即ち

ニ、相續稅

ホ、登錄稅

等である。

其二、公　課

イ、普通水利組合費

ロ、大字協議費

ハ、農　會　費

ニ、其　他

私は第一章に於て現今農家の經濟狀態は收入より支出が增すことをお話したが此收支を調和せしめて償ふて餘りありといふ事にする爲には收入の各費目を吟味して之を增すことを考へると同時に、又支出の各費目を調査して節約の出來る限り節約するといふ事が最も肝要となるのである。

第三章　農家經濟を順調にすべき方法

第一節　收入を增加せしむべき方法

此項では種々お話しなければならぬ事があるけれども、人により所によりて話しを異へなければならぬから何れの人何れの所にも通有の事柄を一つ二つお話して見たいと思ふ。

一、生産收入の增加法

イ、一定の土地面積を有すべきこと、

農業者にして土地を持たぬ者は小作人である、けれども此小作人で居るのは總ての点から考へて不利益であるから我々農業者は如何しても一定の土地を持つことを考へなければならぬ、今迄日本にも多くの農業經濟書は出來たが一つも農業者としては少くも幾何位の土地を持つべきであるといふ様な事柄に說き及ぼして居るものはない、又ドノ村に行つても百姓に向つて土地を持てと敎へる人も無い様であ

る、之れ日本の百姓の貧乏する所以ではないかと私は思ふ。

私の調べた結果によると日本の社會の現狀から考へて農業者は一体ドノ位の土地を持たなければ相當の暮らしは出來ぬかと云ふに少くも一町二反歩は必要であると思ふ（之れは勿論自作、若し小作なれば其倍を要す）私が斯ふいふには根抵のあることで各方面から研究して之れだけは是非持つて貰ひたいと思ふのである、聞けば靜岡縣は一戸當り耕地反別八反八畝歩とかいふ事で卽ち一町歩足らずであるが、日本全國の耕地反別と農家總戸數とを勘定すると耕地約一町歩一寸餘に當つて居る、今日世界に文明國は數多くあるが其何處の國を調べて見ても農家一戸當りの耕地反別一町歩といふ國は一つも無い、歐羅巴で耕地反別の一番少いと言はれて居る自耳義國でさへ二町歩當りである、私は日本人がこんな狹い耕地を耕して甘丁度日本の倍になつて居る、

んじて居るから其收入の增加が出來ぬのであろうと思ふ、故にお互は此土地を擴げる事を勘考するのが最も必要で少くも一町二反歩の耕地を持つ樣に心懸けなければならぬ、而して若し周圍の事情が之れを許さず如何しても擴げる事が出來ぬといふ場合にはそれに代るべき方策を採らなければならぬ、卽ち如何するかと云へば

ロ、地目の配當を宜敷くすべきこと、

が必要である、耕地が少い時には是非共此地目を種々に入り交へるこが必要である、卽ち米のみを作つて居つたり、茶のみで金を擧げるといふ樣な事は不利益至極で、種々の地目の上に色々の仕事をして、時々に金を收めるといふ工風を案出せなければならぬ。

ハ、土地の整理改良に工風すべきこと、

整地整理の利益は既に萬人の知る處で、卽ち大な事のみを擧げても

1　地積を增す
2　灌漑排水に便利となる
3　農道整理の結果仕事容易となる

などの利益があるので、地積を增すのは卽ち所有反別を增加するといふ事になるのである、故に土地の整理といふ事は單に耕地のみならず山林や原野も整理し宅地も整理する事が必要である、所によりては二毛作をやるが如きも宜しい、之れ皆擴地といふ事を意味するのである。

**改良といふ事に就ては第一深耕が必要である、所により橫に土地を擴げる事は出來ぬ場合が多いから下へ擴げること卽ち深耕が必要で、此外尙精耕と云ふ事も必要であるし、客土といふ事も時には必要な場合がある、要するに狹い面積から廣い面積同樣の效果を擧げる爲には

此土地の整理改良といふ事が切要となるのである。

二、土地の利用を考ふべきこと、

之れも亦必要なことで、島根縣の簸川郡といふ所は日本中で最も米の産額の多い所であるが、此邊の百姓は土地の利用といふ事が頗る巧みである、大社街道といふ縣道が通つて居るが此道の兩側に雜艸が生ねるのでそれを壓倒する爲に凡て苜蓿が植へてある、其隣りの大原郡は所謂大原デボンといふ牛の産地で有名な所であるが川の堤防に牧草の種子を播いて之れで以て牛の飼料を得て居るといふ有樣である、其他山の裾の水田に近い部分で高い木を立たせては水田の害になるといふ所には三椏や雁皮などを植へて居ると云ふ具合に有らゆる土地を巧みに利用して居る、溜池なども堤防さへ堅固であつたならば之れに魚類を放飼して副業とするのも一つの利用であると思ふ。

又一つの土地に作付けする作物の種類に就ても考へなければならぬもので、作物は其種類に依つて同一の土地に連作するを可とするものと甚だしく連作を忌むものとがあるから、連作を嫌ふ作物は互に輪作するが得策で、何れにしても我々は何處々々迄も此土地の利用といふ事を忘れてはならぬのである。

三、資本の融通を宜敷くすべきこと、

敢て農業のみに限らず何仕事でも資本が無ければ出來ぬもので、農業も進歩すればする程多くの資本を要することになるから、田舍に於ても金融の便を圖ることは最も肝要である、卽ち報德社、産業組合法に因る信用組合其他各種の金融機關を設くる必要ある所以で、資本に事

缺けては思ふ様に仕事も出來ず、思ふ様に仕事が出來なければ從つて收入が擧らぬ事になるのである。

へ、資本の使用を巧みにすべきこと、

資本といふても金ばかりの意味ではない、農家に於ては肥料は大事な資本である、又た灰小屋も一つの資本で牛、馬、鷄の様な動物も茶、桑、果樹の様な植物も其他農具や種子の様なものも皆之れ資本で、數へ來れは多くの種類がある、けれども最も緊要な事柄は之か使用を誤らざる事と之を使用して可成多く役に立たせるといふ二つである、卽ち種子ならば皆發芽し皆生育する様に之を播き、苗木ならば皆活着し皆發育する様に之れを植へ、金ならば皆活きて働く様に之を使はなければならぬので、斯くせぬ限りは決して收入は上らぬ事になるのである、故に

此資本の使用といふ事に就ては深く研究しなければならぬ、元來日本人は金を儲けたいといふ觀念は非常に發達して居る方で、資本を豊にすることは相當考へて居る様であるけれども、其豊かになつた資本を活かして使ふ方法に就ては餘り考究しない傾がある様に思はれる、之れ大なる間違ひで青年會などでも或は夜業をしたり、道路の修繕に從事したり、又は植林などをやるのは誠に結構ではあるけれども、扨之に依つて得た所の金の使ひ方を考へないのは之れ日本人に通有の一大缺點である、是れは正しく教育の罪で、日本の教育が總て金の儲け方は教へても金の使ひ方を教へないのに座するものと解釋して差支ない と思ふ、故に差當り青年會などでは此金の使ひ方といふ問題に就て研究するのが必要で、例へば茲に或特志者が金五圓を青年會に寄付したといふ場合に（此特志者が斯いふ方面に金を寄付したのは良い使ひ方

である）青年會は之を五つに分けて金壹圓宛の賞を懸けて其壹圓の使ひ方を各會員に考究せしめるのである、うして各會員から出た答案を審査して最も有効なる使ひ方を案出したもの五名を選抜して各壹圓宛を與へ、其各人の考案通りにうれを使はせるのである、さうすると、其青年は同じ壹圓でも考へれば斯くも良い使ひ方があるものかと其後自ら金の使び方に注意する様になるもので、多くの利益を齎らすことになる、私は金の使ひ方を知らぬ、否金の使ひ方の悪い日本の金持に向つて、今少し其使ひ方を研究して貰ひたいと思ふものである、兎に角吾々は資本の使ひ方を巧みにして有形無形の收入を增大するが肝要であろう。

卜、基礎資本に對する經營資本の割合を增加すべきこと、

經營資本に對して基礎資本の多大であるのは之れ又日本農業者に通有の一大欠点で、西洋の農業者は是等の事も旨くやつて居る、基礎資本とは土地とか家屋の様に主として固定資本的のもので、經營資本とは肥料代、種子代、飼料代、農具代などの様に主として毎年新たに注ぎ込むべき資本をいふのである、卽ち土地なり家屋なりに比して肥料とか種苗などに要する費用を常に潤澤に支出せしむる事を得る様にする事が大切で、今之れを數字的に云はうならば、例へば獨逸では

資本	下農	中農	上農
基礎資本	八〇	七〇	五五
經營資本	二〇	三〇	四五
基礎資本に對する經營資本率	二五%	四三%	八二%

といふ事になつて居る、所が我日本にはまだ斯の如き必要の調査が皆目出來て居らないので、世の經濟學者などは何をして居るかと疑は

れる位である、又之れを實際經營して居る百姓に聞いて見ても何れも知らぬといふ、こんな事では迚も旨い事農業を經營する譯には參るまい、僅かに先年栃木縣農會で其縣下の自作農十六戸に就て調べたものがあるがうの外には見當らない、故に今りれに就て調べて見るに日本の農家の基礎資本に對する經營資本の割合は實に一四・三四%で、獨逸の下農に比べても尚遠く及ばぬのである、此事實は換言すれば日本の農家は土地や家屋にも金を使ふが毎年農業をやるに必要なものには餘り多くを費やさぬといふ事になるのである、之れは決して收入を增加する所以の途ではないので、從つて農家の經濟が危殆に瀕するのである、西洋人の家は概して日本人の家より小さい、尤も大きなものになると非常に大きいので、現に紐育の中央に六十間四方の高さ何十階といふ家があるが、其中に住む人數は實に一萬六千人といふ事である、こ

んなのも無論少くはないが然しながら百姓の家となると皆日本の百姓家より小さい、のみならず農家では百萬圓位の財産家でも穀倉以外の倉庫を持つて居ない、所が日本人は一寸芽を出して來ると直ぐ倉を建てる、尤も中に入れるものがあればガラクタ道具が抛り込まれてある、土地が狹い、擴げなければならぬと云ふて居る所へこんな無用の長物を建てるからこれに金がかゝつて思ふ樣に肥料も買へなくなる、一年中には修繕費も要る樣になるから種子代に金が出せなくなる、思へば日本の百姓は只体だけでやつて居るので無手の百姓である、恰度昔の戰爭の樣なやり方であるが戰爭のやり方も昔とは大邊違つて來た今日農業の經營法も亦大に面目を一新しなければならぬ事と思ふ、殊に西洋では種子ばかりの試驗場や鑑定場などが出來てる位で日本

の農家に比べて種子といふものを非常に大事にする、農具も亦凡て精巧で日本などの迚も及びもつかぬものばかりである、日本人は元來貧乏でありながら而も家は大なものに入つて居る、之れ種子代や肥料代に充分の資本を投ずる事が出來ぬ最大原因で、從つて生産收入が增加せぬのである、といふて今更家を潰して建てかへるにも及ばないが今後新たに建てるといふ樣な場合にはお互大に考へて欲しいのである。

チ、勞力の分配を宜敷くすべきこと、

勞力の分配を宜敷するといふ事には二つの意義がある、卽ち一は期節の分配を宜敷することで、他の一は家族の分配を宜敷する事である。

1、年中の各期節に繁閑を生せざる樣勞力を分配すること＝＝＝＝＝日本の農業は期節に依つて其繁閑の差が甚だしいものである、之れ勞力

使用上大損の事で一年中適當に分配する事が大切である、今日本全國の勞力を計算して見ると關東と關西とは多少異るけれども、關西地方では一人一年の勞働日數は平均百九十二日になつて居る、所に依つては無論之れより多い所も澤山あるに違ひないが、一年三百六十五日から此百九十二日を差引いて殘る百七十八日は如何に暮すかといふに之れは寐たり食つたり飮んだり買つたり打つたり遊んだりに暮らすのである、私は農家の勤勞時間が此の如く少いといふ事が收入の少い原因であらうと思ふ、五月六月は麥刈や田植に忙はしく、十月十一月は麥蒔や稻刈に多忙で猫の手迄も借りたい位に思はれるが、其外の月は如何かといふと多くの農家は閑である、此閑な時に所謂小人閑居して不善をなすで失費が多くなり勝ちになるからうれで經濟が旨くいかん事になるのである、故に此繁閑を平均する爲め先きに述べた地目の

配當を宜敷くして種々の仕事の出來る樣に各種の土地を持つことが肝要である。

2、家族の何れもが家業に從事すること――日本の農家の勞力は之れを一家族に割り充てゝ考へて見ると、戶主が最も多くを分擔し、次は細君で、其次が息子といふ具合に家族全體が同じ樣によく働くといふ組織になつて居らぬ、卽ち五人の家內があつても働くのは二人か三人で、働く者同志の間にも其分量に又多くの逕庭がある、私は之れも亦農家の經濟が收支相償はぬ樣になる一つの原因だろうと思ふもので、子供は子供、老人は老人でうれ相應に働く樣な事にせなければならぬと思ふ、西洋では家畜は必ず農家に付きものになつて居る、家畜には勿論種々あるが牛馬羊豚其他家禽をも飼つて居る、之れが西洋の農家の家族を一人も遊ばして居かぬ事にするので、子供は鷄の世話をなし、息

子は牛乳を搾る等うれ〳〵各人に適する業務が年中あることになるので、之れが西洋の農家の收入多き理由である、然るに日本では家族中仕事に携はる人が限定せられて居るから、うれで西洋の農家の反對に收入は少く支出が嵩む樣になる、近來日本の農家でも養鷄などが盛になつて來たり、子供に草刈をさせたり、一坪農業などもやる樣になつて來たのは喜ぶべき現象である。

リ、勞働者の使用を巧みにすべきこと、

少し大きな百姓になると奉公人を使ふものである、中百姓や小百姓でも二六時中は使はぬが忙はしい時には傭ふといふ塲合が隨分ある、傭人の賃金は季節や人間に依つて大低一定して居るが、主人の使ひ方一つに依つて六十錢の日傭取りに一圓の仕事をさせる事も出來れば、

六十錢は六十錢だけの仕事をさせる様にもなり、又六十錢出しても四十錢分しか仕事が出來ぬといふ事もある、故に傭人を使ふ場合にはお互は、如何にせば最もよく働かせる事が出來るかと云ふ事を考へるが肝要である、此勞働者を使ふことの最も巧みであると目されて居るのは支那人であるといふ事で、私は多くを知らぬが兎も角も支那人は日本人よりは慥かに上手な様である、卽ち彼等は勞働者を使ふ場合には主人も必ず之れと倶に勞働に從事して勞働者と同じ様に働いて居る、故に勞働者は少しも横着な事は出來ない、云ひ換へれば支那人は自分の勞働を以て使用人を使ふのであるが日本人は只願で使つて居る、それ故使れる人にしても本當に働けぬのが當然で高い賃錢が無駄になる譯であるから、これはお互大に注意すべき事と思ふ。

又、畜力、機械力の利用を講ずべきこと、

これは動物の力や器械器具の力を利用することで田地や仕事の少い所では不用なものであるが、而しながら仕事の種類によつて如何しても動物を使ふことが肝要で、又器械や器具を使用するが必要である、昔の様な時代なら兎も角仕事が多くなるに付けて自分の勞力は他の有益なる事業に使ふ必要が起るから、勞力の節約利用の上から茲に畜力や機械力使用の必要が起るのである。

之に就て世間には往々誤解する向きがある、卽ち動物や又は器械力にのみ依賴して自分の働くことを差控へる人がある、例へば自分の働きでは一日に一反歩しか耕作が出來ぬが、牛ならば三反も四反も出來るからといふので、自分が一日休んで遊ぶといふ事をする人もある様であるが、それでは大なる心得違ひで、自分は田を耕すより尙他の有益な事業に其勞力を使ひたいといふ塲合に牛や器械を使つて

初めて價値あるのであるから此邊は大に注意せなければならぬ、言ひ換へれば勞力を有効に使ふ爲めに畜力や器械力を借りるので此考なくして此等の力を頼む時は、斷じて收入を增加する事が出來ぬのみならず、寧ろ却つて支出を增大する事にもあるのであろう。

ル、事業の選擇を誤らざるべきこと、

交通の便が段々開けて來るに從て運輸の便も亦開けて來るものであるが、農業をやるにしても之等の事が便利であるか不便であるか、都會へ接近して居るか居らぬか、土地の廣狹及肥瘠、勞力は得易いか如何か、資本は潤澤であるか否か、原料の種類は如何といふ樣な種々の事を考へて、此處に於て此場合我々の爲すべき事業は斯くあるべきであるといふ事にせなければならぬ、さでないと收益の增加は決して望み得

られぬのである、世の中には人の後廻りばかりして居て損する人が往々あるものである、隣りの人が蠶で儲けたと云ふと自分も來年は蠶をやる、生憎氣候が惡くて蠶が失敗する、米が高いからといふので稻を作ると今度は相場が下つて思はしくないと云ふ樣に、只單に人の儲けた話のみを聞いて、其人が何が故に儲けたかと云ふことを少しも考究せず徒らに眞似するから、こんな事になるのである、卽ち事業の成否は所に依り時に依り人に依つて皆違ふものであるから其選擇はお互大に考へなければならぬのである、勿論今の世の中では凡ての事業皆利益を擧げなればならぬ樣になつて來て居る事は判つて居るが、人から聞いて成程さういふ仕事があつたかと始めて悟るなどは既に己に遲いのである、良く自分で考へて自分で選擇して確固たる信念の下にやつて行かなくてはならぬ、さうして人のやつた事とか乃至は又人から聞い

た話などいふものは只其自分が選擇の參考として咀嚼するに止むべきものであろうと思ふ、これが爲に必要なものは卽ち智識である。

ヲ、組織の改善を怠らざるべきこと、

經濟書の中には經濟組織の事に就て種々の說明がある、我日本の農業組織は耕種農業組織といふので土地を耕耘するを土臺とする農業である、所が西洋の農業組織はと云ふに彼等は普通一般牛馬羊豚等の畜類を必ず飼つて居る、之を飼畜農業組織といふ、それから靜岡縣の一部では製茶で主に收入を擧げて居る所があり、廣島縣へ行くと所謂備後疊表で金を擧げ、鹿兒島縣では甘藷で燒酎や酒精を造つて收入を得、栃木縣では冬瓜で干瓢を作り、愛知縣では大根で切干を製し、鎌倉地方へ行くと豚のハムや腸詰を盛んに拵らへて收入を得て居るが、斯ういふ樣な組織を加工製造農業組織といふのである、歐羅巴の瑞西といふ國では百姓が時計を造つて居る、時計屋も無論あるが內部の細かな器械や細工は皆百姓がやつて居る。

飼畜農業組織は動物が主であるから三百六十五日必ず食物をやらなければならぬ、尿尿の仕末もつけてやらなければならぬ、子畜の世話もしてやらねばならぬし、乳か出ればそれも搾つてやらねばならぬ、卽ち仕事が多く而も年中あるのであるから勞力の平均がとれる利益がある、耕種農業組織は大面積ならば良いけれども日本の樣に五反百姓では如何しても仕事に繁閑は免れない、加工製造農業組織は原料に依つて一概には云へないけれども、兎も角日本從來の農業は前にもいふた通り耕種組織で、之れのみでは益々收入を增加することは六ケ敷のである、故にお互は耕種副業組織といふものを案出せなければならぬと

思ふ、卽ち在來の通り耕種を本業とし之れに其地方適當の副業を見付出して之を組み合はせた農業組織とする事が肝要である、此頃多くの農家を見ると今迄田ばかり作つて居つた人が養蠶をやつて蠶が一二年も當ると蠶にのみに身が入つて田作りの方は横着をする者が往々ある、愛知縣などでは此風が中々甚だしい、勿論蠶に精出すのは良い事であるけれども一方に於て本業を閑却するといふ事は斷じて宜敷くない、勞力の方で横着したならばセメテ肥料でも多くやればまだしもだけれどもそれも却つて少くする、それ故米が穫れなくなる、益々身を入れぬといふ事になるのである、そして之れは本業だ、之れは副業だと云ふて居るからこんな事になるので、茲に新らしい農業組織を造つて卽ち耕種副業組織とした方がよかろうと思ふ、そして本業は熱心にやり所謂副業も亦熱心にやるといふ事にせなければならぬ、例へば諸君

各自に於ても從來の本業は何處々々迄に改良し得らるゝかを究め、其餘力及怠けて居る力を利用して地方に最も恰適する副業を見出し、そして此組織に變更すると收入の增加は期せずして得らるゝ樣になろうと思ふ、元來日本の樣に狹い國では殊に副業が必要で本業だけでは遂に農業はやれぬ事になろうと思ふ、卽ち一町二反歩は無くてならぬ所で多くの百姓は五反歩しか持たぬのであるから勢い他に何か收入を索めなくてはならぬ事になる、廣島縣の沼隈郡地方は一戸當りの耕地が僅かに三反餘畝歩であるが、而も收入は一戸當り六百圓近くに上つて居る、ドウ考へても不思議でならぬが之れは冬の間の閑な時を利用する仕事、卽ち疊表を製するから其方の收入が多い故である、尙一つは此地方では農家が盛んに木履を造つて居る、原料は其界隈には無いので遙々北海道から取り寄せて、それを郡內の農村で下駄に造り上げ

て全國に賣り出すのである、それで其邊の青年の意氣込といふものは盛んなもので「疊表も下駄も人に履まれるものだ、されど財産を作ることに於ては我々は人を履む考へである」と、其意氣實に賞すべきものがある、而も之れ皆耕種の暇に出來る所の仕事で立派な耕種副業組織といふべきである、三重縣の伊賀の國に名張町といふ所があるが、そこから一里半ばかり離れた所に錦生村いふ所がある、戸數は至つて少い村であるが全村楊子を造つて居る、既に二十年來の經驗といふ事で器械迄使つて盛んに拵らへて居る、原料はウツギといふ木の種類で三寸廻り位の、材としては一向價値のないものである、之を山から伐り出すのは特殊部落の人達で、長さ三尺位に伐つたものを鉈で所々叩くと木にヒヾレが出來る、それを兩手で引きむしると細い薄い片々となるから、今度は機械にかけて適當の長さに切つて先きを尖らせて作るので

ある、石油發動機など使つて居つて仲々大仕掛けにやつて居る、そして其出來た品は日本へは賣らずに直ぐと神戸に出して神戸から西洋に送つて居る、それが年々三百萬圓に上るといふ事である、而も之れが役に立たぬ木が原料で冬の内の暇な時に出來るのである、其外我々は夏になると洋傘をさすがあの洋傘の柄も伊賀の山中で農家の手に副業として作られて、それが大阪に出て全國に擴がるのである、又學校などで使ふペン軸も矢張り伊賀の山中で出來るので、木の利用も亦大ならずやと云はなければならぬ、又料理屋などに行くと親子箸とか子持箸とかいふて割箸の中に楊子の入つて居る箸が膳に付けてある塲合があるが、あれは尾張の國の葉栗郡草井村といふ所の百姓の手で出來るもので、木曾の流木を拾つたり犬山といふ所で賣る材木の端片を買つて拵へるのである、而も其對岸の人達は副業が無くて困つた〳〵と云

つて居る、世の中は實に面白いものである、又木曾福島の向ふに奈良井といふ町があるが、此處では櫛の製造が甚だ盛である、其お得意先は支那だとの事で彼の三億の支那人が辨髪に入用であつたのである、然るに御承知の通り支那に革命が起つてまだ承認はされぬが兎も角共和國になると同時に髪を切つて仕舞つたから、名古屋では鳥打帽子が賣れるといふて喜んで居るに引きかへて、木曾の山中では櫛が賣れぬといふて大恐慌を來して居る、之れ支那革命木曾の山中に及ぶといふ譯で面白い現象と云はねばならぬ。

兎に角狹い耕地から多くの收入を擧るには何等か仕事を見出す事が肝心で、それが爲めには世の中を知らなければならず、從つて學問が必要となつて來るのである、さうして到る處に充滿して居る原料を活用するでなければ生產收入の增加は又覺束ない事になるのである。

7、技術（學理）の應用を巧みにすべきこと、

御承知の通り農業者は餘り儲けてはならぬといふ天の思召か、商工業者にも無い、銀行業者にもない、さうして農業者のみに課せられた所の收穫▲▲漸減率といふ一つの法則がある、例へば玆に一反歩の田地がある、として之れに五圓だけの肥料を施し人夫を二十人使つて仮りに壹石の米を收穫したといふ時に、此肥料代を倍して拾圓となし人夫を倍して四十人としたならば二石穫れた、而らば肥料代を三倍して拾五圓とし人夫を三倍して六十人としたならば三石穫れるかといふに今度は二石六七斗しか穫れぬ事になる、更に肥料代を四倍して貳拾圓とし人夫を八十人としたならば如何といふに今度漸く三石穫れる位のもので決して收穫が四倍になつて四石穫れるといふ譯のものではない、卽

ち或程度迄收穫が進むと其後は如何に資本を投じ如何に勞力を費しても收穫は增さぬものである、こんな事は商買には無い所の法則で獨り農業者のみ此法則の支配を受なければならぬ而も何といふても免れる事は出來ないのである、而しながら必要があるのであるから、お互は茲に於て大に悟りを啓く必要があるのである、而しながら脊に腹は代へられぬといふ諺のある通りで我々は此の際如何しても收穫を增大する爲めに此法則を破らなければならないのである、それには學理が極めて必要となつて來るのである、例へば仮令收穫は少くても其物の値段が高まれば收穫を多く得たと同じ結果になるので、卽ち惡い品物を三石穫るよりも品質上等のものを二石五斗穫つた方が却つて利益な場合が澤山ある、收穫の方は前に話した通り何處迄も增すことは出來ないのであるから收量の絶頂に達したものは品質の改良といふ事を圖るが肝要で、品質の向上改良は實に學理應用の賜である、學理が進めば收穫漸減率の存在を殆んど認めない様な結果を齎らす事にもなるのである。

名古屋の北に山田村といふ所があるが其處に長田利平といふ青年がある、今年廿五六歳であるが私共の知る限りに於て近頃愉快な百姓である、此附近は一帶の水田であるから、父祖傳來水田百姓をやつて居たのである、所が少し離れた清洲附近には畑があつて而も促成栽培が非常に盛んであるから長田は小學校卒業の頃からドウゾして促成をやつて見たいといふ希望を持つて居つた、或時此希望を陳べて父に懇望した所が父は言下に之を刎ねつけて「貴樣水田で働くことが厭な爲めにうんな事をいふのだろう」と大に叱り付けた、所が利平はこれは父が誤解して居るから此誤解を解かねばならぬといふので、其儘口をつぐんで其後といふものは骨身を惜しまず水田に働いて人一倍の勞働

をした、れ故父も安心して喜んで居ると利平は今から數年前の冬に又父に向つて促成をやりたいが失敗つてもつまらぬから試驗場へ隔日位に見學にやつてくれと賴んだ、元來利平が斯ういふのは勞働がイヤサに云ふのでは無い事が今はよく父の腹にも判つて來て居るから父も今度は我を折らざるを得ない、乃で試驗場へ促成栽培の見習にやつた、僅か二冬の研究であつたが一心といふものは恐ろしいもので大抵の要領は判つた、れ故家に歸つて框を一つ造つて胡瓜や茄子を作つたのである、然るに非常に成績がよくて僅かの日數に此四五尺の巾に二間位の一框の內から父が一年中に一反歩から穫る米と同じ價値のものを得たのである、之れを見た父も考へた、利平は此處だといふので框の數を增すことを父に提議した、父は無論承諾したので又一年やつて見ると非常に成績が良い、今度は親爺の方が熱心になつて「序に尙

框を增したら如何だ、乃公も手傳ふ」といふ樣になつたのである、れから又熱心は工風を產むで感心な事には此利平が昨年は試驗場の技術員が迎も及ばぬ事を案出して、他の人よりも一週間早く品物を市へ出す樣にしたのである、さうすると此事を大阪の商人が聞き込んで態々尋ねて來て大阪へも品物を出して呉れといふ事になつて今大阪へも出して居る、此家にお祖母さんがあるが小さな籠に茄子を入れて枇杷島の市場へ賣りに行くと歸りには七八圓の金を持つて來ることが出來るので、生れてからこんな樂しみな事はない、ドウカ大阪などへ出さずに私に名古屋へ賣らしてくれと云つたといふ事だが、兎も角も曩には叱り付けた父も今では遣れ〳〵と乘り氣になつて居るし、地方の靑年會員も皆利平に倣つて澤山作る樣になつて、今では組合的の販賣法に依つて大阪、四日市其他へ出して居るといふ有樣である、れして之れ

は冬の仕事で、夏は此利平も父と共に水田へ出て專心稻作に働いて居る、此利平からいふと卽ち學理の力で收穫漸減率を免がれたのである が、さらば乃公もといふので諸君が直ちに此眞似をやるとうれは大失敗である、何とならば之れは名古屋といふ都會があつて地の利が良いから良かつたので、利平は前に述べた事業の選擇が巧みであつたし、加ふるに學理の應用を誤らなかつた結果である、こんな新らしい仕事をせずとも只品質の向上種類の改良を圖るといふ事によつて隨分收入を增加し得ることを覺らなければならぬ、愛知縣は海西郡の鍋田村に鎌島新田といふ所がある、無花果や枇杷の產地であるが在來種の無花果は口を開いて居つて雨が降ると腐る、枇杷も日本の在來種は果が小さくて値打がない、所が此處に一人の地主があつて之れ等の種類改良の必要を認めて良質の無花果及田中枇杷を移し植へたのである、然るに元來が適地であるから此種類改良が非常な好成蹟を擧げて、今では五十八戶の部落で貳千圓內外の苗木を賣り出す樣になつた、之れ等も亦學理應用の賜である。

斯ういふ事は尙他に多くあろうけれども、要するに耕作反別の少い所で尙且收穫漸減率に支配されなければならぬ百姓は、如何しても此學理の應用を巧みにやるでないと又斷じて收入の增加は出來ないのである。

カ、商的經營を宜敷すべきこと、

今の百姓には商買氣がないと之れは確かに一つの缺點であると思ふ、偶々商買氣のある人は皆損をして居るといふ始末で、こんな事では困つたものと云はなければならぬ、兎も角今は昔と世の中が既に違つて

居るから百姓も亦損をせぬ樣な商的經營をせなければならぬのである、卽ち昔は作さへ良ければそれで良かつたものである、租稅も米で納めたし、食ふものも自分の作つたもので事が足りて居つたので、總て農業者は稅金も生活の原料も自家生產のもので濟んだのであるから、作が主となつて居つたもので、親作、自作、小作など只作々さいふて作がよければ、豐年ぢや、萬作ぢや、と唄つたり、踊つたりしたのである、今となつては之れは大昔の事で、若しも百姓が今尙こんな頭で居る樣ではチヨン髷は無くなつても依然としてチヨン髷、百姓さいふてよかろうと思ふ、卽ち今では租稅も金納である、着物も吳服屋へ行つて金でなければ買へない、煙草も金、酒も金、下駄も金、傘も金で身邊の事物一として金でないものは無い、扨其金は何處から出るか、作で得た處のものを賣却して、卽ち作の結果の賣上げ金でなくてはならぬ、されば故昔は萬作ぢや、で

踊つて良かつたけれども今は金を握らなければまだ踊れぬので、作柄がよくて早く既に踊る樣な人は所謂昔頭でチヨン髷を付けて置いた方が遙かに似合つて居る、所が今の農業者は只單に作物を立派に成熟せしむる事をのみ旨とする風があつて、此風は當業者のみならず、試驗場や講習所其他の指導者も皆作の世話燒のみをやつて居るさいふ次第であるから、農家は事によると萬作でも勘定が合はぬ場合があるのである、されば故賣上金を握つて仕舞はなければまだ百姓は安心が出來ぬ譯で、其大切な賣上金を作が良ければ良い樣に、惡ければ惡いなりに可成多く擧げる爲には先以て商的經營が上手でなければならぬ、此考が頭の中に入つて居らぬ樣では又決して農業で收益を增すことは出來ない、良い例がある、昨年愛知縣地方は非常な作柄で二百十日も無事に過ぎ二百二十日も事無く經過したれば故農民一体に氣を緩めたので

ある所が天は流石に御親切なもので作が良くて安心する様なものには一大痛棒を加へてやろうといふので、九月の廿三日に暴風雨を御見舞ひ申した、稻は倒れる、花は飛ぶ、學校なども一郡で二十餘も倒潰するといふ仕末で、全縣下大恐慌の慘狀を呈したのである、之れは作を喜ぶは愚の極で金を握らなければ安心の出來ぬ好適例である、うれから又此頃米が非常に高いが、來年は……といふと薩張り見當がつかぬ、昔はこんな變動はなかつたといふ事であるが、今の様に變動し通しでは農業上に豫算を立てることが出來なくなるので農家經濟上困つた事柄である、我々農業者は勿論米價の高からん事を欲する、而し其高價が持續すれば良いけれども時に暴落する様な事があつては安心が出來ない、如何しても此相場の保持といふ事が必要である、而して此農業者の常に欲する處の相場の維持及向上は如何にせば望み得られるかと云

へば、うは巧みなる商的經營に依らなければならぬ。

元來百姓が自分で米を作つて置きながら買ひ手に値段をつけて貰ふといふのが既に大なる間違ひである、尤も米を作る人に米一石がドノ位の資本で出來るかを尋ねて見ても孰れも一向知らぬのであるから自分で相場の踏めぬのも無理からぬ事ではあるが、而しこんな事は世界廣しと雖百姓だげで、何處の三文店へ行つてもまだこんな呑氣な店はないのである、卽ち今の百姓は佛でこんな佛は餘り賞められたものではない、要するに今日は金を握らなければ之れで良いといふ事は出來ぬのであるから、收穫物を上手に金と代へる算段が肝要である、うして此商的經營の方法にも種々あろうけれども、

1農産物を商品たらしむることと――が肝心で、うれには商品たる

の資格を知らなければならぬ。

品質の統一（大小があつたり、乾濕があつたり、又は種類が混交して居る樣では商品たるの資格はない。）

一定の數量（米にても何にても一斗や一石ばかりあつても決して商品とは云へない百石千石と纏まらなくてはならぬ。）

貯藏に堪ゆること、又は運搬の安全なること

其他種々あろうけれども少くも以上の三條件は揃はなければ決して商品とは云はれないのである、けれども此等の三條件は如何しても我々個人の力では不可能の事柄で、勢ひ共同の力に俟たなければならぬ、私は今後村農會の執るべき進路なども確かに斯ふいふ方面にあろうと思ふ。

亞米利加の西海岸では金時豆や鶉豆などの豆の需要が甚だ多い、日本は元來豆國であるから、殊に向ふでは相場は如何に高くても構はんと云ふて居る矢先、大に送り出したいのであるが一粒も出して居らぬ、

之れ一定の數量が纏まらぬからの事で殘念な次第である、彼地で有名な日本の堂本氏などは以前は澤山花を作つて居たが、今では全部豆作りに代へて仕舞つた、先年桑港の永井總領事が名古屋へ來て、日本には試驗場などもあるから、何とかして纏まるまいかと云はれた時に、私は迚も纏まりますまい、其の纏まらぬのが日本の特徴ですからと云ふて大笑ひに笑つた事であつたが、何しても各村々々で凡ての農產物を商品たらしめる事をせなければ大邊な損であるから、諸君にも大に考へて頂きたいのである。

2　荷造りに注意すること――現代の農產物は荷造りの不定な爲めに不便不利が甚だ多い、例へば米の一俵の升量が縣に依つて違ふなどは大に研究すべき問題だろうと思ふ。

3　取引――此頃米が高いとか安いとかいふけれども、取引は何處

でやつて居るか、見付や中泉で取引しても利益は薄いので大阪とか東京とかいふ大きな所で取引する事と、尙確實に取引が出來る樣にせなければならぬ。

4 廣告――商買人は此廣告といふ事に全力を注ぐものであるがだが「ドウも立派な良いものが出來ましたねゐ」と云へば、多くの百姓は「イ、エ如何致しまして……」と自分で貶して居る、商買人はりこになると狡猾で、內容は如何でも外觀だけは良くするといふ風にあらゆる廣告手段を執つて居る、勿論農業者は商買人の樣に自慢をする必要はないけれども、相當の廣告はせなければならないので、商的經營には最も必要な手段である、元來百姓は賣つて儲けるものをも賣らずに居つて、それで合はぬ〳〵とこぼして居る、これは賣らぬが悪いので賣る爲には、は法螺を吹かず自慢をせず相當の廣告をするが極めて必要であると思はれる。

5 販路――農產物の販路に就ては今日政府も大に考へて居る樣で、殊に靜岡縣などは特用作物の栽培が盛んで海外輸出もされる樣であるが、さうなると百姓も有利になるものである。

要するにこれからの百姓は巧妙なる商的經營に依つて、作つたものを良く賣ることを考へると共に、又其價格を向上し維持することに努力せなければならぬものである。

ヨ、加工製造の研究を爲すべきこと、

凡て原料は値段が安いのは之れ當然の事柄で、玄米よりも白米が高く、甘藷よりも甘藷切干や澱粉の方が價値が高いのである、それ故百姓

は須らく其農産物に加工することが必要である、日本人が皆一致協力すれば所謂米屋といふ白米營業者はいらぬ事になる、殊に此頃の様に玄米飯が盛んになつて來ると益々いらぬ事になる、兎も角精米事業なども立派な副業とすることが出來るのである、三重縣一志郡の或組合では副業に此精米をやつて、久江の聯隊の兵隊の食ふ白米を全部納めて居る、白米の方が割合で高く賣れて、米糠が自分の所へ殘つて、剩へ暇を利用することが出來るのであるから斯ういふ事は至極良い事だと思ふ、現今何處へ行つても副業々々で農家としては是非共副業の必要な世の中に、昔からあつた副業迄も皆無くした例へば昔は衣服は綿を作つて、紡績を拵らへて、自分で織つて、仕立上げたもので、酒なども自家で穫れた米で濁酒を造つて舌皷を鳴らし、煙草も自作のものを手で刻んで之を喫み、履き物は夜業に之れを

作るといふ具合で皆暇な時に作り込んだものである、故に日本の農家には昔は家庭工業が非常に盛んで副業は山程もあつたのである、所が今は之れ等の仕事を皆工業家に奪はれて仕舞つて適當な副業を見出すのに苦心をして居るといふ有様である、之れは誠に殘念な事で正にお互が考究すべき要項であろうと思ふ、うして其講究の結果を着々實行したならば隨分と收益を擧げることも出來様かと思はれる。

夕、交通運輸の便を計るべきこと、

之れも亦生産收入を高める上に大切なる事柄で、この邊は開けて居るから左程此感じがないかも知れぬが、此等の便の惡い處は收入に影響する處が多いものである、交通運輸の爲には水路と道路とが必要で、之れからの世の中は又大空といふものもこの仲間に入る様になりつ

ゝある、けれごも兎も角道路が惡いといふと原料にも相場にも損をせねばならぬ破目になるものである、三重縣の多氣郡に大きな山があつて亭々雲を凌ぐ樣な大木が澤山に生ひ繁つて居る、所が之れに通ずる道路がない爲めに伐るに伐られぬといふ有樣で、仕方なしに樹の皮を剝いで居る、何故皮を剝ぐかといふに枯らす爲だといふ、實にドウも勿体無い話であるが而し伐つて賣り出した處で到底引合はぬといふて居る、又島根縣の或郡で郡有林を經營した所が矢張り伐るに金がかゝるといふので延期して居るといふ事實もある、こういふ所では彼の岐阜の惠那山の奥で紙を製して居るが、あゝいふ樣な事でもやつたらよかろうと思はれる、日露戰爭の時愛知縣の東加茂郡で道路が不便な爲め、矢張り運賃が嵩む故に炭燒きと師團の經理部と契約が出來なかつた事實があつた、之れに反して交通路を開いた爲めに生產を增加させた例も決して乏しくはない、德島縣に神領村といふ所がある、高い山中の村で此村へ行くには七曲といふ坂を上らなければならぬ、山の麓は縣道が通つて居るが、此村に入る道は年々歲々運動しても郡道にもならなければ縣道にもならぬ、乃で村の人々はこれは人の力を賴むからで出來ないのであるといふので、山の中の三ケ村共同して拾壹萬圓を投じて五里の間立派な道を開いた、所が三年經たぬ內に此拾壹萬圓といふ大金を取戻したといふ事で、今尙盛んに山の中の產物が他に搬出されて莫大の利益を收めつゝあるのである、これも考へて見れば只一本の交通路を設けたのみで此の如き收益が現はれたのであるから、村道なり郡道なり此道路といふ事を尊重するといふ事も亦必要な事柄である。

レ、協同の利用に力むべきこと、

之れ又判り切つた事柄であるけれども、ドウも農家諸君がやつてくれない、元來日本人には共同心はあるけれども、うの協同は喧嘩とか戰爭とかいふ方面にのみ現はれて、生産方面には戰爭の時の樣な擧國一致といふ態度が見られない、之れ誠に損な事と思ふ、此邊に盛んな報德といふ事も之れ共同の塊で、産業組合も亦共同である、此の如き協同心を尙更に擴充して、或は害蟲驅除の上に、又は米穀改良の事に益々利用されたいものであると思ふ、或地方に行くと共同苗代に非常に反對して居る所がある、其處の人達に共同苗代は損かといふて尋ねると、否決して惡くはない、けれども當局者が無理にやれといふから吾々はやらぬといふて居るが、何れにしても共同といふ事は我々の決して閑却し

てならぬ問題である、三重縣の津田村に村有財産を拵らへるに就て面白い話がある、此村には七つの部落があつて、各部落共多少の部落有山林を持つて居るが、只一つの大字だけ少しも持つて居らぬ、うれ故普通ならば財産のある部落と無い部落と集まつて、一つの津田村の村有とするのであるから必ず不平が起るべきで、從つて統一が出來ぬが當然である、所が流石に訓練された村民と見えて部落有林を持つて居る部落民は、我々は祖先以來此山林で利を得て來たのは誠に幸福であるが、今迄山林を持つて居らなかつた部落民こそ誠に氣の毒であるといふので、喜んで之を提供した、すると山林を持たなかつた部落民も、只で之れに仲間になるのは如何にも心苦しいといふので、一戸當り參拾九圓餘を出金して貳千圓といふ金を出し合つて山林の代りにせめてこの金を……といふて出した、而るに一方では金は受取らぬといふ、片方は

只で仲間入は出來ぬといふ、斯ういふ喧嘩はイクラあつてもよい、乃で村長が仲裁に入つて兎も角も委せよといふ事にして、扨村長のいふには村民の斯ういふ心懸けは誠に喜ばしい、就ては此貳千圓は今後の植林の費用とするのが良かろうといふので圓滿に解決がついたといふ事であるが、斯ういふ所であるから共同苗代も立派に出來て居る、うして凡ての事業に補助金など受くるは恥辱だといふ意氣込でやつて居るが、自ら助くるものは天之を助くで、此共同が出來ると非常に愉快な事が生れて來るものである。

ソ、妄りに職業を轉せざるべきこと、

生産收入を增加する上に於て此一項も亦餘程大切な事柄だと思はれる、近頃農業者の趨勢を見まするに、兎角新奇なものに趨るといふ風

がある樣であるが之れは宜敷ない現象だと思ふ、例へば幾年來やり來つて居る普通作物を捨てゝ、新奇に何か儲かるものがあると聞くと、直ちにそれに走るといふ事をやるが之れは考ふべき事である、例外は勿論あるが全體農業は年に一度しか經驗が出來ぬものであるから一度失敗すると取返しが付かぬ事になる、うれ故手慣れた仕事をやるといふ事が肝要である、而し又學理から考へて斯くやれば必ず可也といふ仕事もあるから、うの邊も無論考へなければならぬ、例へば共同苗代の樣なものは利益があるといふ事に決まつて居る、然るに中には一二回の經驗で、之を利益無しといふ口實の下に排斥するものもある、之等の人は良い仕事でも、熟練せなければ成蹟が擧るものでないと云ふ事を知らぬ輩と云ふべきで、學理に於て良いと認められて居る事柄は一二回の失敗で懲りずに、經驗を積み、研究を重ねて、熟練する迄やらなけれ

ばならぬ、所が農家の或者は熟練せる普通作物を止めて、一時の流行に驅られて新奇な仕事に就くと云ふ傾があるはドウも心得違ひの様に思ふ、御承知の通り商業や工業は、人や機械が對手であるから事が仕易いけれども、我農業は天と地と及人間とを向ふに廻はして、殊に譯が判らぬ天地を對手の仕事故、良いと知られた事でも豫期した通りに行かぬのは蓋し當り前の事である、之れ農業上の仕事は凡て相當の年數を經て熟練する迄やると云ふ事が肝心であるのである、要するに農業者は昔から經驗に富んだ仕事は之れを尊重せなければならぬもので、勘定に合はなければ之れを合ふ様にするがよいので、徒らに新奇な仕事に趨ると云ふ事は農業者には禁物であるが、而し一旦之れは良いと決心して信じてやりかけた仕事は、飽くまでも熟練する迄やり通すと云ふ事が必要で、今日の農業者に熟練を貴ぶ氣風の薄くなつた事は、誠に殘念に思ふ所である。

近頃名古屋が非常な發展で、水道が出來る下水が出來るといふので仕事が澤山ある處から、近村から出て來る者が非常に多い、これ等の人は皆百姓は馬鹿々々しいと云ふて來る心得違ひのものであるが、面白い事には此頃米の値段が高くなつて來たから、日當を取つても米を買つて食ふ様では暮らせないと云ふので、こんな事なら寧ろ昔ながらの百姓に返つた方がましだと云ふて、ボツ〳〵田舍へ歸る者が出來た、爲に一時名古屋で三千軒からの借屋が充滿したけれども、今度は續々と空屋が出來た、而るに昨年は御承知の通りの凶作、それ故是れ等の腰の浮いた連中は、矢張り町の方が良いと云ふもので、又候名古屋へ出て來た、つまり一昨年から二度も名古屋へ往復して居ると云ふ仕末で、こんな事では身を立て家を興すことは斷じて六ケ敷い、農業者は必ず慣れ

た仕事の上に基礎を置いて、熱心に研究もし、調査もし、改良もして、收入の增加を圖らなければならぬ、而して人の經驗に徵し、進歩した學理に照して、やりかけた仕事は一二回の失敗に挫折せず、慣れるまで繼續する心掛けがなければ、農業は到底お互の爲めになる樣な仕事ではあるまいと思ふ。

名古屋の町續きで小牧街道の町はづれに清水町と云ふ處がある、十年前に原製糸といふ大きな製糸工場や、何々工場などいふ澤山の工場が出來た時に、其附近の百姓は「こりや迚も百姓では駄目だ、工場に通へば金になる」といふ事で、親爺も息子も娘もいふ具合に、留守居には足腰の立たぬ老人と子供を殘して置いて皆工場に通つた、所が此處に一人の百姓があつて斯ふ云ふ時に吾は兼て熟練の農業をやるべきだと云ふので、專心百姓に働いた、然るに世の中は愉快なもので、此頃になつて

見ると、其時工場へ通つたものは今尙依然として辨當提げて工場通ひをやつて居るが、熟練せる業に限ると云ので百姓して居た者は、今や隆々の勢ひで中農以上の地主兼自作農となつて居るのである、工場へ通つて居る者は曰はく「あの時にあんな考を出さなかつたら」と嘆息して居る、けれごも今になつて思つた所で六日の菖蒲で既に遲いのである、伊賀の國の阿山郡に山田村といふ所がある、良村であるが十年間に戸數が百二十戸も耗つたといふ事である、之れ皆山の中はイヤだとふいので都會に出たのであるが、近年になつて出掛ける者が無くなつて、一人二人宛歸つて來るといふ事である、こんな山奥にも斯ういふ事實がある處を見ると、之れは現今の日本の風潮で、而も惡い風潮と云はなければならぬ。

以上十八項之等の事を實際諸君の村諸君の家の生産上の事に就て考へて見て若し當る處があつたならば須らく其点に就て努力すべきで斯くて初めて得る處決して尠くはあるまいと思ふのである。

二、財産收入の增加法

仮りに今茲に財産が拾萬圓あるとするに此拾萬圓の働かし樣如何に依つては之れから收入を擧げ得られるものである之れが爲に必要な事項を概略話して見よう。

イ、財産の選擇配當利用に巧みなるべきこと、

▲▲選擇――明治四十一年に愛知縣農會で地主會を開いた事があつたが其際横井博士が地主諸君に向つての講話中に世の中が開けて來ると都會が膨脹する都會が膨脹すると勢ひ都會附近の土地の値段が昂る」といふ事を話された、さうすると來會者の一人で碧海郡の竹内弐郎といふ醫者で地主の人がツト立上つて四方八方を見廻はした、何であんな事をしたろうと後で聞いて見ると博士の話された其値段の昂る地所は一体ドノ邊だろうといふので見廻はした譯だといふ事であつた、りして氏は直ちに預金して置くが良いか又は地所にしたが良いかと考へた其結果地所の方が良かろうといふので地所を買ふ事に決心したのである、これ卽ち財産の選擇で此地主會が散會すると直ちに氏は名古屋の東端に行つて土地の賣物の有無を確めた所が有るといふ事を知つて直ちに手付けを打つて一先づ歸り更に改めて出直して四千參百圓で土地を買つたのである、すると其頃からポツ〳〵共進會の話が進んで、トウ〳〵名古屋の東の方へ其敷地が決定したから

急に其土地の値が昂つた、乃で氏は一昨年其土地を七千五百圓に賣つて、差引參千貳百圓の利を得たのである、此竹田といふ人は中々面白い人で、其參千貳百圓を私の處へ持つて來て、扨云ふのには實は此金は斯う〳〵いふ次第で儲けたものではない、全く貴方が横井といふ先生をお招きになつて、私にうまい事を教へて下さつたから儲け得たのである、れは私の懐に入るべきものでは無之れも餘程儲かつて居るが、之れは私の智慧で買つたのであるから、貴いから、貴方に差上げますといふ事であつた、乃で私はれは結構だ、さういふ金ならば私も貰ふ譯にはいかぬから、幸ひ之れを資本に米券倉庫を設けては如何だといふので、私のいふ通りにする事になつて居る、氏は更に言葉を續いで、私は元金の四千參百圓で他に又土地を買つて方の所へ差上げる譯にはいかぬといはれて共に笑つた事がある、竹内

氏の此やり方などは財産を巧みに選擇したものといふべきである。

2、分配――之れは堅い財産家になると考へられて居るけれども、東京や大阪の財産家の様に成金の財産家には、まだ考へて居らぬ者が多い様である、名古屋の財産家が何故に堅いかといふと、之れは財産が古いといふ事と、從つて其財産が旨い案排に配當されて居るからである、例へば自分の家は商業家であるから商業資金も無論使ふが、土地も必要といふので、農業にも放資する、一面には銀行も經營する、山林も持つといふ様に各方面に配當して置くと、萬一ドチラに蹉跌が出來ても、他の方の利得で一向差支のない様にする事が出來るのである、三河の國の下地町に渡邊平内治といふ、田と畑とを持つて居る地主がある非常に篤志の人で、小作の保護奬勵其他に力を盡して居られる人であるが、曾て其地方に養蠶の勃興した時分に、畑の借り手のみ多くて田の

方は作り人がなかつた、此時氏は田の方の利益を畑で擧げたので、今では又反對に田の方の作り人はいくらもあるが、畑の借り人がないといふ風になつて來て居るが、今度は畑の利益を田の方で擧げるといふ事になるので、要するに此配當が上手に行はれると、ドチラへ轉んでも元も子も無くせる樣な事はないのである。

3、利用――財産は之れを運轉し、利用して、多くの利益を擧げねばならぬ、銀行などは利子は安いから確實なる起業家などに貸す方が財産利用上得策の場合が多い。

ロ、大なる財産は大なる收入を伴ふことを覺るべきこと、

大なる財産には大なる收入を伴ふものである、されば故財産は可成大きくせなくてはならぬといふ事になる、然らば如何にせば財産は大きくなるかと云ふに、之れには順序がある、卽ち

1、人が働く時代
2、金が働く時代
3、金と利子とが働く時代

かう云ふ三階級があるので、もう金と利子とが共働動作をやる樣になると、人は寢て居ても財産は出來るので、此財産から入る收入を財産に組入れる工風をすれば、敢て生産收入に齷齪せぬでもよいと云ふ事にもなるのである、彼の亞米利加の富豪カーネギー氏などは日々に殖へる財産の事が心配になつて、死ぬにも死なれぬと云ふて居るとの事であるが、かうなると財産を產むから殖へ方も大きいのである、人間は此時代になるまで辛棒することが大事である、けれども大抵の人は人の働く時代に根氣負けがして仕舞ふから駄目なのである、辛棒

は辛いものだとは云へ、長い間ではない、セメテ金が働いてくれる迄辛棒すれば、其後は金が働き利子が働くから、自分は樂になるのである、此れ迄の忍耐が人間には極めて必要であると思ふ。

「金と云ふ字を解剖すれば
人には辛棒が第一よ」

と云ふ歌もあるとの事であるが、實際金と云ふ字はよく見ると、人ニ●ハ一●が一●といふ劃から出來てる事を思へば、我々人間はどうしても此辛棒をするでなければ、決して收入を增すことは出來ないのである。

三、勤勞收入の增加法

此勤勞收入には或は勞働者の受くる賃錢、官吏や先生の報酬等、其他いろ〳〵あるけれども、これ等の勤勞の結果受くるものを增加させるには

イ、左の六項を兼有し之を發揮すべきこと、

1、眞面目（正直）
2、精勤
3、着眼
4、仕事の選擇
5、技巧
6、熟練

以上六項の內普通の勞働者ならば眞面目といふ事と、精勤といふ事とが最も重要で、多少智慧を要する仕事になると、着眼及仕事の選擇といふ事が餘程大切になつて來る、それから技巧と熟練とは何れの仕事

にしても大切な事柄で、此六つの要素が兼備して居つて、それが何れも遺憾なく發揮せられたならば、必ず他に比べて收入は多くなるので、勞働者にしても喜んで人が傭ふて呉れる樣になるのである。

自作農にしても眞面目と精勤とは最も必要で、又時勢を見て之れに伴ふ所の仕事をなし、場所を見て之れに適合する所の事業を起す爲め、着眼といふ事も決して忘れてはならぬ、そしてこれが良かろうと考へて、選擇が出來てやりかけたら旨くやる事が肝心で、それが爲には熟練を要するといふ事になるので、之れ勤勞收入增加の一法である。

今日の農業者は比較的眞面目で、又精勤であるといふ事が出來ると思ふけれども、着眼や仕事の選擇になると一向駄目である、又昔から作つて居る稻とか麥とかいふものは割合上手に作るが、園藝とか飼畜とかいふ新らしい業務になると、頗る技巧が拙い樣に思はれる、之れ等は

此際大に注意を加ふるが肝心ではあるまいか。

口、勤勞收入を增加するには左の順序を知るべきこと、

1、勞働（主として体力に依る）
2、體力と智力との勤勞
3、智力と財力との勤勞
4、智力と財力と意力との勤勞
5、體力と智力と財力と德力と意力との勤勞

今お互が一文の金がないとして、體力さへ充分健康であれば、只單に勞働することは容易で、從つて今日食ふだけの事は必ず出來よう、卽ち車を借りて之を挽いても、仮令んば土方になつても、其日暮しをする位の事は出來るに違ひない、之れ等は最も簡易な勤勞で、身體さへ丈夫な

らば誰でも出來る、所が體力のみに依らず、之れに相當の智力を加味すると、一段の收入を增すことが出來るので、更に尙金力を添ふれば、ヨリ大きな仕事が出來る樣になる、今の私共は體力と智力の時代で、今日普通の實業家といふものは、多く智力と財力とが勤勞する時代である、更にモー一段偉らい人になると、智力と金力との外に意力が加はつて來る、卽ち辛棒強いといふ事、失敗しても挫折せぬといふ事などは、意志の力が强くなくては出來ぬもので、之れが加はると大仕事が出來る、然るに西洋人は此意志の力が甚だ强いけれども、悲しい哉日本人は之れに反して頗る弱い、之れは誠に困つた話で、目的を達する迄は如何に苦勞しても、成し遂げずば承知せぬといふ力を養成して貰ひたいと思ふ、最後の體、智、財、德、意の五力兼有の人は、世の中で最も大なる仕事をなす人で、言ひ換へれば最多の收入を得る人である、されば故我々は常に我々の

有する此五力に就て考へて、其足らぬ所を增補する樣にせなければならぬのである、此頃實力と云ふ言葉が流行るが、私は此五力の集まつた力を名付けて實力といふて居る、少し話は橫道に移るが、ドーモ此日本人には實力が乏しい樣に思はれる、卽ち日本人は、

1、體力――が凡て弱い、先づ目方から考へても西洋人に比して甚だ輕い、西洋の一等國民は男子一人前の目方は平均十八貫となつて居るが、日本人は徵兵檢査の時の調査に依ると、平均重量が十三四貫になつて居る、諸君の內には一人前の男も居るけれども、十八貫の人は一人も居らぬ樣に思ふ、先づ大抵の人は西洋人に比べて三四貫目少いと云ふ事になつて居る、私は身長が五尺八寸ある、五尺以上は一寸目方とかいふて、一寸に付き一貫宛增すが當然とかいふ、けれども若し之れが眞であるとすると、私は十八貫なくてはならぬ勘定である、けれども十

七貫しかない、之れは痩せて居る証據で、之れは私のみではない、此目方の少いと云ふ事は、日本人全体か痩せてる事を証明するのである。次ぎに壽命も西洋人より短かいし、健康も亦弱い方で、一口に五千萬の同胞と云ふが、其内醫藥に用のない人は僅かに千五百萬人で、殘る三千五百萬人は醫者にも罹り、藥をも飲むといふ不健康者であると云ふ事である、殊に日本人には消化器病が非常に多い様であるが、之れは畢竟食ひ意地の汚い事を示すもので、餘り立派な事ではない、それから又眼も悪いものが多いといふ具合で、日本人の衛生狀態は宜しきを得て居らない、故に我日本人の體力は、一等國民としての價値がないといふ事になるのである。

2、智力は如何かと云に餘程賢くはなつて來たが、まだ〳〵駄目である、細かく詮議する迄もない、一等國の國民は自分の國の言葉

より外尚他の一國の言葉位は皆讀めるものである、日本人なら日本語の外に英語なり、獨逸語なり、各人が皆話せる位でなければ一等國の國民であるとはいへない、世界の一等國といはれる英國や獨逸などに行くと、皆二三ケ國の言葉は明らかである、尤も日本人も形式だけは二ケ國の言葉を知つてる様になつては居る、卽ち停車場へ行くと、ドの看板にも日本の字と横文字とが書いてある、燐寸にも横文字があり、石鹸にも、襯衣にも書いてある、ころから見ると、如何にも横文字が讀めさうに思はれるが、而も實際は一向に讀めない、燐寸に書いてあるからマッチといふ事だろうと推斷する位の事である、之れは之れからの青年諸君などが大に考へなければならぬ事であろうと思ふ。

3、財力は之れは取立てゝ說明する迄も無い事で、日本が貧乏であるといふ事は、世間一般の通り相場である、日本人は金入卽ち財布

や墓口の事をキン着といふが、金が入るからキン着といふ譯ではなく、金は入らぬでも平氣でキン着といふて居る、御承知の通り明治三十年に貨幣制度が發布せられて、金貨本位の國といふ事になり、貳拾圓以上の受授は金貨たるべし、貳拾圓以下五圓以上は銀貨でも差支なし、五圓以下は銀貨及白銅貨、銅貨等の補助貨幣を用ゆるも可也、といふ事に決められて既に十七年目にもなつて居るが、國民のキン着は事實上のキン着ではなくて、依然として、銀着であり、銅着であるといふ始末で、即ち名實相ドウ着して居るのである、雪隱の中に永く踞んで居ると臭く感じなくなる樣に、銅着をもキン着〳〵といふて敢て怪まないといふのは、自分ながら誠に困つたものだと思ふ。

4、德力――我日本は昔から德育の發達した國で「子曰はく」といふ調子で、國民に道德を敎へたものである、れ故日本位古くから道德の盛んであつた國は無い、昔ばかりでない、今の小學校が又此德育に重きを置いて、修身時間もあれば、又明治二十三年に下し賜はつた勅語の普及法にも色々苦心して居る樣である、即ち日本人位德力が備はらねばならぬ樣に出來てる國民は世界に無いのである、然るに、不思議な事には、其德力が一向發揮せられて居らぬ、西洋の敎育は日本のれとは大に異つて、或は電氣であるとか、或は汽車であるとかいふ樣な事柄の敎育のみで、何處の學校へ行つても修身時間といふものは少しも無い、即ち特に道德の敎育といふ事はやられて居らぬのである、れ故物質文明が非常な勢ひで進歩するのは當然の事で、道德文明は決して進まぬだろうと、誰れしも早合點するのであるけれども、而も德力は非常に發揮して居る、りして發揮しなければならぬ筈の日本なごの遠く及ぶ所ではないのである。一体日本人は印といふものを持つて居るが、此

印を持つてる國民は世界中に日本人ばかりで、之れは日本人の言行は當てにならぬ、書いた証文でなくては信は置けぬと云ふ證據である、私は愛知縣立農林學校の校長で、從何位で勳何等で而も脊は高し鬚はあるし、コケなら頭も下げ様といふ、先づ一トかごの男であるけれども、其私が學校で一ヶ月働いて月給を貰ひに行くと「貴方印がありますか」と書記が云ふ、うして印が無ければ決して月給は渡さない、自分が働いて自分が、取りに行くのだから、これ位間違ひのない確かな事は無い筈だけれども、印なしでは渡して呉れぬ、うれから家へ歸つて下女に印を持たせて取りにやると、何とも云はずに渡してくれる、如何です、取りに行く人間は學校で一時間も働いた事のない下女だ、印は水牛材の僅か拾七錢のものだ、うれでも此印さへあれば此下女にでも金を渡すので、之れから考へて見ると、人間の信用など云ふものは實に情けないもので

印代の拾七錢にも若かぬ事になるのである、私は報德の教へを信じて居る者が、印を持つてる様な事では駄目であると常に思ふものである、恥を話さなければ判らぬが、私は倫敦で銀行へ金を預けて大に心配した事がある、即ち金を預けたいと云ふたら、名刺の三倍大位の紙を出して金額と名前を書けと云ふ、うれを書て出すと金を出せと云ふ、乃で三千圓出してやつたが、うれを取り入れたなり何とも云はない、確かに預つたとも云はなければ又受取証もよこさない、覗て見ると他の人と話をして居る、友達に聞くと日本の様に受取証などは出さぬ、而し決して間違ひはないから安心すべしサ、といはれたが、若し間違つたら困ると思ふて大邊心配した事があつた、之れ人を見たら盜賊と思へといふ國へ生れて居るので、油斷をせぬ習慣が付て居るからの事であるが、一方から云へば日本人には德力が無い事を證明するものである、此話を京

都の教育會でやつた所が、大森といふ知事さんが「イヤ君！矢張僕でも印が無ければ俸給は渡して呉れぬよ、之れは國風とでも思ふて我慢すべしサ」と云はれましたが、同じ國風とするなら、もつと良い國風にしたいと私は思ふ。

5、意力――之れ又定評のある處で、日本人は凡て熱し易い性があるが、又甚だ冷め易い性を持つて居る、之れ意志の弱い事を意味するもので、一つの問題に逢着して如何に損をなしつゝあるかといふ事は問はずして明らかである、只茲に外國移民の例を引いてお話すると、獨逸人が他國へ移民する時には彼地へ着くと、先第一に何を差置いても墓場の詮議をする、之れ獨逸人は移民する上からは、既に死を決して其地に來た事を證するものである、英國人は如何といふに、彼地へ着くや否や先以て運動場を設ける、健康を損じては何にもならぬといふので、

自分達の身を落付けるよりも先きに此運動場に着手するのである、然るに日本人に至つては、墓場の詮議もなさず、運動場も設けず、彼地に着くが早いか先第一にドコに行つて何をするが一番儲かるかといふ事を考へる、之れ卽ち儲けたらサッサと國へ歸るといふ事を思つて居るので、故山を憶ふといふ方面からいへば惡い事では無いけれども、其人個人からいふと意志の弱いといふことを證するのである。

之れを要するに、前にも述べた通り此の體、智、財、德、意の五力が兼備して初めて實力があるといへるのであるが、以上の如く日本人は五力が五力共、其他の一、等國民に比して甚だしき遜色がある、而し此五力が養成されぬ間は勤勞收入は決して增加し得られぬものであるといふ事を、吳々も承知して貰はねばならぬ。

八、信念と快感に伴ふ勤勞の收入は大なることを覺るべきこと、

信念とは他人が何と云はふがうんな事には一向頓着なく自分の良いと信じた事は何處迄も成し遂げるといふ念力の事で快感とは何時も愉快な心を以て仕事をするといふ意味である此二つがあれば農家勤勞の收入は必ず多大となるものである愛知縣は幡豆郡西尾町に荒川仁太郎といふ百姓が居る親から讓られた土地は五反歩餘りであつたのに自分の一代に七町歩に增した今は孫もある年齡ではあるが四町五反を自作して居る眞黒になつて働く樣は隣人が皆驚嘆して居る所である特に小兒も妻君も異體同心でやつて居る樣は眞に農家の模範とするに足るのである偶々人ありて如何して斯の如く働けるや、と問へば、やつてやれぬ事はないと思ふ分である、と答ふる由なるが、

之が卽ち信念である又彼は思ふ事が出來る程愉快な事はない此愉快を思へば一週間や二週間は眠ないでも苦しいの疲れるのといふ事はないものだと云つて居る由なるが此快感の情は益信念を進むる所以だと思ふ。

福岡縣田川郡の赤村に小關忠平といふ本年八十一歲の老農が居る一昨年九州の大演習の砌り恐れ多くも明治天皇陛下が御前に召されて親しく其經歷談を聞こし召されたといふ程の名譽を得た忠良なる百姓である此人は十五町歩を自作するといふ精勤家である內八町歩は果樹園であるさうなが仕事に順序が立つて居るのと精勤なるのと家族が皆愉快に立働くのとで極めて整理よく作が出來て居り石垣の穴まで利用されて居るといふ位である此人も百姓ほど有難いものはない百姓ほど結構なものはない農業ほど面白いものはない農業ほど

趣味に富めるものはないといふ信念が固く、爲めに他を顧みず、外を願はず、只自家の業務に忠實なるがため、其の長命も、其の圖欒の幸福も、其の名譽も得られたものである。

御縣小笠郡の相草村なる松本喜作氏も亦信念の人である、人は松本樣の樣に働けぬといふが、之は信念が同氏に及ばないのである、人は彼の人は別ぢやといふが、之れは信念が人に超へて居るのである信念の前には難儀はない筈である、信念のある人には疲勞は癒ね易いもので ある、信念は人を精勤にし、辛棒強くし、萬難を排する勇氣に充たさしめ、常に欣々然として業務に服さしむるものである、故に信念は金よりも物よりも、何よりも、貴い根底的のものである。

次は快感であるが、始終快感を以て仕事に從ふ爲めには好きな仕事でなくてはならぬ、所謂好きこそ物の上手なれで、好きな仕事は上手に

なり、從つて快感を覺ゆるものである、何仕事でもイヤ〳〵ながら働いては碌な事は出來ない、苟も成功を思ふものは必ず常に快感を以てするが肝要で、殊に家業は如何でもかうでもやらなければならぬものであるから、欣々然としてやる方が悧巧で、捗りも早いし、又仕事に親切も盡せることになるのである。

以上三項目を辨へて居つたならば勤勞收入は自然多くすることが出來やうと私は思ふ。

一、支出減少の第一法

第二節　支出を減少せしむべき方法

イ、支出の費目を明かにすべきこと、

支出の費目には三種ある、卽ち、

1、必要費 ― 生產費、生活費、等

2、有益費 ― 公共費、慈善費、等

3、有害費 ― 冗費、浪費、等

これで、此に就て我々は如何に考ふべきかといふに 1、必要費といふのは節約の餘地あるもの、2、有益費は分度の大切なる費目で分度外に出すのも考へ物であると思ふ、3、有害費はいふ迄もなく嚴に禁

止すべき性質のものである、この心得がないと支出の減少は出來ないのである。

ロ、必要費に就て考ふべきこと、

必要費の內生產費は多くの項目から成るが、今はこれは云はぬ、主として生活費に就てお話するが、先以て昔と今とは生活の要件が多少違つて居るといふ事を、一言して置きたいと思ふ、卽ち昔は生活といへば衣、食、住の三つを要素としたので、之れさへあれば事缺かず生活は出來ると思つて居つたのである、中には今でも然かく信じ居る人もある樣であるが、之れは昔の頭である、一寸考へても今日人間が馬鹿でも世間が通れるやといふに、決して馬鹿では今の社會に面出しは出來ないのである、卽ち敎育といふ事が現今の社會には缺くべからざる一つの生

活要素で、四ヶ年の義務教育年限が六ヶ年となつたのも、茲に鑑みる處があつたからで、更に進歩すると八ヶ年にもなろう、既に今でも八ヶ年制を採つて居る村もある、外國などは多くは八ヶ年で、獨逸の内には十ヶ年の處もある、うして此の義務教育は國民たる以上、ごんな者でも受けなければならぬのであるから、教育費といふものは現在生活と、須臾も離るゝ事の出來ぬものとなつたのである、次に衛生費であるが、之れも亦生活と離されぬ所のもので、東京などでは水道の水を飲まなければならぬ、此邊でこう水は償のないものであるけれごも、東京などの様な都會へ行くと、水にも金がかゝるのである、うれ故普通一般の農家では、衛生費は臨時費でよいけれごも、世の進歩と共に或所に行くと、生活費の中に入れるが當然といふ事になるのである、尚一つ生活と離れることの出來ぬものは娯樂費である、私はこれも亦生活費に入れるべき

筈のものと思ふ、尤も文明の進歩しない田舍では、態々生活費の中に入れる程の事はないが、世が文明に趨くにつれて、今後は如何しても生活費の中に入れる様になろうと思ふ。

此の衣、食、住費、教育費、衛生費、娯樂費の六が生活費となる世が來る事は明白で、日本では今は衣食住費と教育費との四が生活費であるけれごも、西洋諸國は既に以上六つが生活費となつて居る、うして此生活費は年々歳々嵩む一方であるから、動もすると此頃の様に生活難の聲が起つて來るので、此聲を未發に防ぐには須らく先づ生活費を節約する事を要するのである、生活費を節約するには、然らばドノ費目を節約すべきかといふと、所謂命あつての物種であるから、身體の保全に必要な衛生費は、先以て節約の餘地はない、教育費も節約ずると日進月歩の社會に伴ふことが出來ぬ様になるから、之れも節約は出來ない、さらばとい

ふて娯樂費も、益々働くものは益々慰藉を必要とするから、之れも減ずることは不可能である、されば、故、如何しても衣食住の費用に、金をかけぬ事にせなければならぬ事になる、そこになると西洋諸國では流石に考へて居ると見ねて、國民一般、衣食住費を節し得るだけ節して、その代り衛生、教育、娯樂の爲めには金を惜しまぬといふ工風をして居る、西洋諸國の民は皆上衣は一枚である、冬になれば下衣即ち襯衣を着る、外套を着る、そして寒さを凌ぎ、夏になると上衣を脱ぐ、チョッキを脱ぐ、そして暑さを避けるといふ調子で、一枚の衣を着ることゝ脱ぐことゝと依つて、寒暑を調節するのであるから、極めて簡單で又便利である、それ故簞笥もいらなければ、長持もいらぬ、古くなるか又は流行に遅れると古着屋へ行つて、仕立替へたものと交換して着るといふ仕末で、衣に要する費用は僅少で濟むのである、過日東京朝日新聞に、服裝に關する記事が

あつたが、其の記事の中に西洋人の服裝費は八拾圓であるが、日本人の服裝費は二百參拾圓を要するといふ事が書いてあつた、即ち西洋人は衣服費に於て、日本人よりも金をかけぬこと數等で、社會も亦衣服に金をかけぬでも良い樣に出來て居る、從つて百姓なども極簡單なもので ある、所が日本では春には春の衣服があり、夏には夏といふ樣に、春夏秋冬、常に氣候に準じて着物を代へなければならぬ樣に出來て居るから、從つて數がいる、箪笥も長持もなければならぬ事にもなる、我々は始終洋服を着て居るが、それでも日本では夏服と冬服とが必要である、尤もこれには社會の罪もある、即ち日本では古い衣服でも着て居る人を見ると直ぐ「何だアノ態ア貧乏らしい」と嘲る有樣であるが、これは西洋の樣に社會を進ませて、衣服の節約が出來る樣にしたいものと思ふ。

食物も日本よりは西洋が簡單で、西洋人は皆パンを食ふ、それも毎日

焼くのではなくて、一週間分位を一度に、而も共同で焼くので、それが配達されて來ると、皆ナイフで切つて手で食ふのである、日本の飯はこのパンに比べると大邊面倒で、焚いたり食べたりする迄には釜もいる、櫃もいる、茶碗もいる、箸もいるといふ風に、辨慶の七ツ道具以上に道具を要するのである、而も少し贅澤になると三度〳〵焚くといふ有様で、其暇だけでも少し許りではない、西洋人のは立つて居ても食べる様に出來てるから暇もいらぬ、殊に分量も少し、容器はドンナ御馳走でも皿さへあれば用は足りて行く、其れ故日本の様に膳椀などの木で拵らへたものや、陶器磁器など色々なくてはならぬといふのに比べて、甚だしく簡單である、酒も日本酒はカンを付けなければならぬが麥酒はそのまゝでやれるから之も簡單である。

家になると更に簡單で、家を持つてるものは甚だ少い、多くは人の家に住んで居るから、住宅費など碌に入らない、移轉にも極めて樂である、うして西洋人は倉を建てない、勿論種々の寶物など澤山持つ人もあるが、それ等は皆常時公衆の會堂に保管預けをして、衆庶の展覽に供して置いて、必要の場合に家に持ち歸るといふ事にして居る、それ故社會の爲にも非常に利する處があつて、自分も亦倉を建てずに濟むといふ一擧兩得の事になるのである、かう考へて見ると日本人は、食物に於ても西洋料理と日本料理との二通りを食ふ様に、家に於ても住宅と倉庫との二通りを持つて居るので、これは大邊不經濟の事である。

以上述べた様に西洋人は、衣食住が非常に簡單で濟むから、それ故衛生費や娯樂費や敎育費に金を出すことが出來るので、殊に敎育費には最も重きを置いて居る、卽ち西洋人は書を讀むこと非常に盛んで、停車場毎に書籍を賣つて居る、それで西洋人は汽車中でも讀むし、停車場で

も讀む、これ彼等が日に進み月に發展する所以で、日本の様に汽車中では食ふにあらざれば飲み、飲むにあらざれば寐るといふ國民とは、テンデ雲泥の差がある、日本では汽車中で本でも讀んで居ると、彼奴ハイカラだと貶す風があるが、こんな事では何時迄經つても彼等に及ぶ時は來まいと思ふ、又西洋人は運動に非常に重きを置いて、ドンナ小さな町でも、又は村でも必ず運動場の設備がある、所が日本では運動を遊ぶこと、思つて居て、暇があれば食ふこと、飲むことのみを考へて居る、從つて衣食住に身が入るから敎育も進まず、健康も勝れぬのである、而し昔から食はずに居つて病氣した人は無いが、食ひ過ぎて病氣になる人は澤山あるから、我々は可及的衣食住費を節約して、敎育、衛生、娯樂などいふ方面に發展する心懸けが肝心である、此頃元氣なるべき青年で、暖かくもない絹手巾を首に卷いてる者を見受けるけれども、こんな人間は

遠からず、首が廻らぬ様になるであろうと思ふ。

八、有益費に就て考ふべきこと、

有益費卽ち公共慈善に要する費用は、社會が進歩すれば進歩する程增加するものと思はなければならぬ、換言すれば公益とか、慈善とかいふ目的に向つては、應分の寄附喜捨がイツ何ン時でも出來る様に準備して置かなくてはならぬ而も日本人は飲食の爲には惜しまず金を出すが、公共慈善には兎角出し澁つて、先づ他の人からといふ様に、飛んでもない推讓が行はれて居る、これでは文明國民といふには少しくお恥かしくはあるまいかと思ふ。

二、有害費に就て考ふべきこと、

これは申す迄もなく絶對に禁止すべき性質のものであるにも拘はらず、日本人は、非常に之れを出したがるのである、お客があると酒を出す、もう澤山といふても「さう仰有らずに」といふて又すゝめる、此の如くして疊に吸はせる分量も決して少くない、これはお互に腹の中に僞りのあるからの事で、此僞りを除いて仕舞へば、こんな無駄な事はせぬでもよい筈である、酒が欲しかつたらもう一本飲まして呉れといふが良い、飲ませる方でもさう白然に云つてくれると氣が打ち解けて嬉しいものである、如何も日本人は何にもならぬ所で、何もならぬ事に錢を使ふてゝ、りして何とも思はぬといふ惡い風がある、飯を食ひ過ぎて胃活や胃散を頬張るなども可笑しい事ではないか、こんな費用はお互ドウカ禁止の事に腹を決めたいものである、所が金のある人に限つて、餘計こんな方面に浪費するもので、困つたものと思ふゝれであるから或西

洋人は富豪征伐論といふものを書いて、其の書中に、

「金錢を浪費するものは人を浪費するもの也」

といふ一句を書いて居る、實に名言だと私は思ふ、藝者など上げるのは即ち此の人を二重に浪費することになるので、人物浪費の最たるものである、近頃村柄の風儀が非常に八釜敷云はれる樣になつたが、此風儀が亂れるといふのは畢竟するに、冗費と浪費とから生れ來るものである、私は曾て大阪神戸などの社會の半面を見る爲めに、神戸の監獄を見た事があるが、此監獄は舊幕時代の建物で、衛生上にも何一つの缺点もなく、具合よく出來て居る、建築學上からいふても、確かに研究の價値ある建物であるが、此監獄の中に千二百九十餘人の囚人が居つたのである、私は典獄に就て是等囚人の、犯罪の動機及犯罪の種類を訊ねて見たが、昔とは丸で違つた動機で罪を犯して居るのである、即ち昔は食ふに

食へぬ様になつた者が、春に腹は代へられぬといふ所から、罪を犯したものが大部分であつたが、近頃ではさういふ種類の罪人は極めて少い、世の中が進めば社會は凡て複雑になつて、何をしても仕事はあるから食ふ事に困つて、それが犯罪の動機となるといふ事は少いので、多くの罪人の犯罪の原因は、第一は虚榮といふ事、次は一般德義の頽癈といふ事である。昔の人は金を借りて居れば、死んだ人に對しても之れを返したものである、けれども今の人は預つかつたものでも、間がよくば自分のものにしようと考へて居る様である、殊に此監獄を視察して、身の毛も慄つ思ひのしたのは、女の犯罪人で、私の視察した時、三百人餘り居つたが、其多くは二十歳から三十歳位迄の働き盛りの女である、昔の女囚といへば、大抵梅干婆さんであつたといふが、今のは艶々した血氣盛りの、而も美人が多いのである、この又女囚の犯罪の原因が頗る恐ろしい

ので、多くは貧乏人ではなく、必ず五圓や拾圓の金は持てる者で、之が虚榮に捉はれて罪を犯すに至るのである、婦人には尙恐しい虚榮があるが、私は茲に多くを云の勇氣は無い、要するに此虚榮の爲め身上をも、家をも、世をも誤る者が多いので、お互の最も注意すべき要点である。

此故に我々は此有害費を絶對に禁止することが肝心で、社會問題上又決して忽にすべき事柄では無いのである、日本では金は元來乞食の持つもの也といふ様に考へられて居つたので、從つて金の弊害を知らぬから困るのである、尤も金を出さずに居られても亦勿論困る、日本人が西洋に行つて、他の國の人よりも受けの良いのは、金を矢鱈に使ふからの事で、西洋人は一厘でも無駄には使はない、けれども日本人は面倒臭くなると、抛り出すといふ惡癖がある、それで又西洋人は正直なもので、金に依つて挨拶が違ふ、日本人は五錢呉れても壹圓呉れても大抵同

じ様に頭を下げるが、西洋人は壹錢は壹錢、拾錢は拾錢、壹圓は壹圓だけの挨拶をする、斯ういふ西洋であるから、日本人の様に金離れのよい國民、卽ち悪く云へば金をずんざいに使ふ國民はもてるのである、剩錢なども日本では大きな方から出す、卽五圓五拾五錢の剩錢を出すといふ塲合には、先づ五圓紙幣を渡し、次に五拾錢銀貨を渡し、最後に五錢白銅貨を渡すといふ順序であるが、西洋では之れと全く反對で、小さな方から出す、卽ち先づ五錢を渡し、五拾錢を渡し、最後に五圓を渡すといふ風で、之れに就ては日本人でも大に失敗した人が澤山ある。

二、支出減少の第二法

1、購買は廉價にして有効なるを期すべきこと、

これには三通りの區別がある、卽ち、

1、同一の品質の物を廉價に購入すること、
2、同一の品質の物を多量に購入すること、
3、同價にして品質善き物を購入すること、

之れである、これで普通の物を廉く買ひ入れるにも、亦此三通りがある、凡て物を安く購へば、生活費を節約することになるのは當然で、幸に今日に於ては產業組合法といふ法律も發布されて居つて、購買組合といふ便利なものも設立される事になつて居るから、之れに依れば先以て此目的を達することが出來る、又強いて購買組合を組織せんでも共同購入をやれば、又此目的に適ふ事になるのであるから、種苗でも器具でも、乃至は又燐寸や石油などの様な日用品でも、凡て善き物を安く買ひ入れて、費用の節約を計らなければならぬ。

ロ、正確なる取引商店より購入すべきこと、

農家は往々一文をしみの百失ひをやつたり、鰕で鯛を釣る様に狡猾なる商人に釣らるゝ事あるものなれば、成るべく確實なる店より買ひ入れることが、自然支出減少の結果を産み出すものである。

ハ、現金拂は節約を誘致することを辨ふべきこと、

物を買ふに通帳で買ふと都合が良過ぎるから、自然物を澤山買ふ様にもなり、又不要なものまで買ふ様にもなるもので、不知不識の間に支出が多くなるが、現金拂ひで買ふことにすると、買ふ必要のないものは買はぬ様になるもので、勢ひ支出が減少するものである。

ニ、使用に注意し保管を大切にすべきこと、

鍬を使つても後を洗つて置くとか、鎌も後で錆びない様にして置くとかいふ様にすれば、凡て永く保存に耐へて從つて支出を減少することになる、保管中に注意を怠らぬ事も亦此趣意に適ふのである、殊に肥料の如き一旦施せば其形を失ふものに對しては、我々農家として最も使用に注意を要するので、種子の如きは最も保管に氣を付けなければならぬものである。

ホ、土地以外に財産の固定を避くべきこと、

例へば家屋の如きは勿論財産であるが、こんな固定的のものが多くなると、或は修繕費とかなんとかかんとかいふて、支出が段々と多くなるものである、れ故家屋は、勿論汁器、其他家財、道具類などは成るべく簡易にすること、が肝要で、前にも話した通り、日本の農業は元來經營資

本に乏しい缺点があるから、お互に土地以外には出來るだけ財産の固定を避けねばならぬ。

へ、整理、清潔、簡易を期すべきこと、

此の整理といふ事は所謂物事に順序を付けること、始末をつけることをいふので、一体日本人は案外此の整理といふ事に無頓着である、殊に農家に於て甚だしい様である、我々が農家へ行つて見て最も不快に感じるのは、此の不整理といふ事で百姓であるから當然であるとは云ふものゝ、餘りに順序がなく、餘りに亂雜である、之れは一方からいふと物を粗末にする事になるので、早く補修を要する様になるから、從つて支出を多からしむる事になる、帳簿なども正しく整理して、始末よくすることは、支出を節減する途であるから、お互に常に注意して整理の癖

を養はなければならぬ。

清潔といふ事は農家に望むは無理だといふ人もあるけれども、衣類の様なものは常に洗濯を怠らず、家屋敷其他もよく掃き掃除をすれば、只住み心地がよい許りでなく、健康衛生の上にも利する所が少くない事になる。

又お互農家は、あれやこれやと入用の少い道具類などは可成持たないで簡易に暮しの出來る様に、所謂簡易生活をやる事が必要である。

以上三つの事柄は單に家の事にのみいふではなく、或は田園の事にも、其他何事にもよく整理することが肝要で、西洋の農家は仮令貧乏な小作人の家でも、誠によく整理して居る、貧しい家では勢ひ裝飾などゝいふ事は出來兼るもので、床があつても掛け物がなく、壁も荒壁といふ仕末であるから、清潔を以て裝飾とする風で、金持は應接間などに立派

な敷物を敷いて居るが貧乏人は掃いたり拭いたりして奇麗といふことを裝飾として居るのである、然るに日本には「貧すりや鈍する」といふ諺がある位で貧乏人程掃除などには不精となる、そうして髯も剃らず衣類も洗はず、座敷は埃りだらけといふ始末であるが、これはお互大に戒むべき事柄であると思ふ。

ト、高尚なる趣味は支出を減少することを念ふべきこと、

これは娯樂問題に伴ふ事柄であるが、一体趣味といふものは物事が進めば進む程高尚なるを欲するもので、單に茶を飲むにも、茶栓とかいふもので掻き廻はして、或は二口半に飲まなければならぬとやらいふ樣になつて來る、日本人は割合に斯ういふ趣味を有するといふが、これは多分三百年間泰平であつた結果で、各國へ行つても日本位趣味の豊

富な人民はない樣である、西洋人も茶は飲が、只大きな茶碗でガブ〳〵飲むだけで、日本人の樣に春夏秋冬の各時期で違ふ所の、風流な器で啜る樣に飲むのとは大に趣が違つて居る、其他日本の床の間には掛物がある、欄間には彫物がある、斯ふいふ樣な趣味は支那を除けば、我々の狹い觀察では世界中他にない樣に思ふ、衣服なども種々の色合を配合して居る、これも趣味で、西洋の衣服には色の配合は全然無い、一体此のキモノといふ言葉は、世界中何處でも通る言葉で、畢竟日本の着物が大に異彩を放つて居る証據である、又彼の盆石は日本獨特のもので、盆栽も亦他にはない、石燈籠の洋行といふて、此頃石燈籠が神戸から盛に外國に輸出されて居る、之れは日本獨特の趣味の輸出である、此の如く日本には高尚な趣味が澤山あるが、只一つ缺けて居るのは音樂の趣味で、西洋諸國民は非常に此趣味に富んで居る、そうして男も、女も、老人も、小供も

皆其歌の譜を知つて居る、所が日本人になると男女老若に共通に知られて居る歌といふものは唱歌「君ケ代」を他にしては恐らく一つもないといふ有様で、偶にあれば下劣聞くに堪へぬもの位である。

兎も角日本獨特の高尚な趣味は、大に助長し、又缺如せる音樂の趣味は、大に皷吹して高尚なる趣味を養はなくてはならぬのであるが、當今は特有の趣味迄漸次衰へて、飲んだり買つたりといふ様な、卑猥な趣味に下落しかけて居る、之れ卽ち支出を增加させる所以で、以前の様に梅一枝を空き壜に挿して、月を眺めて「寒月や……」を考へるといふ様に高尚な趣味に後戻りさせるでなければ失費を少からしめることは出來ないのである。

チ、健康は臨時の支出を皆無にする事を知るべきこと、

健康は財産で、又立派な一つの收入といふても良いものである、不健康では仕事が充分に出來ないのみならず、多くの醫療費を要するはいふ迄もない事である、うして健康は萬人の皆欲する所であるが、殘念ながら日本人の健康狀態は宜敷くない、私などは病氣の問屋で、殊に胃が惡いうれ故近來多食せぬ事に決めたが、西洋の學者も多食が最も健康に惡いといふて居る、近來八釜敷なつた二木式の腹式呼吸や、靜座法は私は知らないが、白隱和尚の所謂內觀法、卽ち下腹に力を入れる法で、起つて居ても座つて居ても出來るうれで續けて三時間も五時間も饒舌つても、決して水を飲むの、聲が疲れるのといふ事はない、寒い風が吹いて來ても、下腹にウント力を入れると寒さを覺えない、諸君も或は車を挽く時とか鍬を打込む時とかいふ場合には、充分下腹に力を入れて貰ひたいものである、うれから尙一つは下らぬ心配をせぬといふ事で、私

の方には今年は昨年の様に、風が吹かねば良いがと心配したり、金を千萬圓も儲けたら如何いふ様に使つたものかと心配する者がある、實に下らない心配で、健康上にも惡影響があるものである、以上私の保健法は少食といふ事と、下腹に力を入れるといふ事と下らぬ心配をせぬといふ事との三つで、これは諸君にもお勸めしたいと思ふ。

それから又近來人間は、空中の窒素を消化するものであるといふ說があるが、世の中は不思議なもので、進歩するに從つて色々な事が出來て來るものである、仙人が深山幽谷に入つて蕎麥位食つて居ても、壽命は長く血色もよく、所謂白髪童顔で居るのは之れは「オゾン」の關係で、オゾンと窒氣中から攝取する、窒素と作用して營養になるのであると、西洋の書物に書いてあつた。

今一つ健康上に必要な事は働くといふ事である、稼ぐに追付く貧乏なしと昔からいふて働くといふ事は、勿論貧乏せぬ手段として必要であるが、健康增進上にも甚だ有効で、古歌にも、

「健康は只働くに若くはなし
流るゝ水の腐らぬを見よ」

とある。

又西洋人の書いた書物に、世の中に白痴といふものがあるけれど、それは頭を他の物に打ち付けて白痴になつたといふ様に、生れて此世に來てから、何かの原因で白痴になるものは極めて少く、親の罪惡が子に報いて白痴になるものゝ方が多い、古今を論せず、東西を問はず、馬鹿者は大抵金持の息子か、殿様の息子である、日本の狂言に出て來る殿様は大抵白痴である、單に日本ばかりではない、西洋でも皆さうである、之れ皆働かぬからである、働く人は漸次頭腦が明晰になつて、賢くなつて來

る、西洋の書物に、賢明な人になるには是非共手を使はねばならぬといふ事が書いてある、昔の文豪の如きは、盛んに手を使ふたものである、尤も車夫の様に足ばかり使ふても何にもならぬ百姓なら一生懸命繩で綯いて盛に手を使へば、其人の頭は漸次よくなつて、財産も出來て來る、貧すれば鈍すで、手足を働かさぬものは頭が悪くなつて來る、即ち吾れ吾れは、何づれの方面から見ても勤勞の風は大いに鼓吹する必要がある。

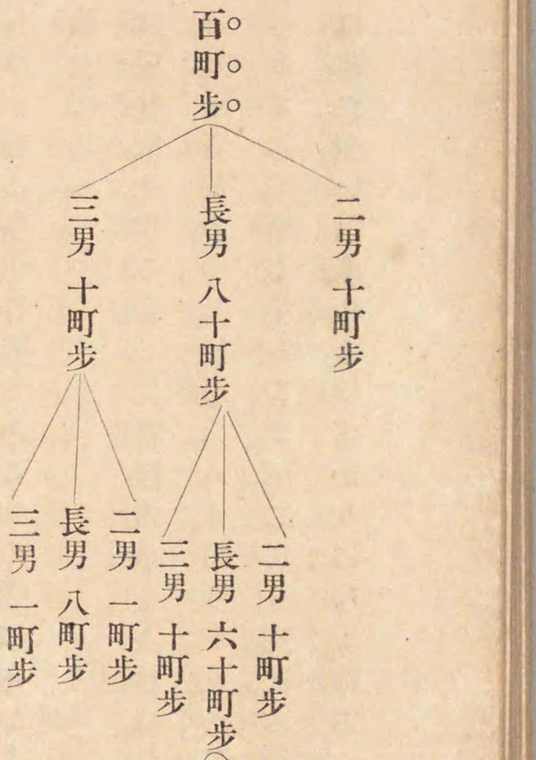
リ、新屋分家を出すは大なる支出を促すことを辨ふべきこと、

新屋分家を出すは日本古來の風である、いふ迄もなく日本は家族制度、且つ長子相續の國である、日本の民法には相續に就ては二つの方面を認めて居る、即ち、

一、家名相續
一、財産相續

の二である西洋には財産相續ばかりで、家名相續といふものはない、我日本の國柄では長男は、家名も財産も相續して行かなければならぬ、猥りに新屋分家を作ると、徒らに小さな財産ばかりのものになつて、經濟が困難になつて來る故に二男三男は相當の敎育を施して獨立自營をなさしむる事が肝要である、この事は今から三百年も前に熊澤蕃山も論じて居る。

新屋分家を作ることは我國古來より行はれた事で、仮りに茲に百町歩の分限者があつて、長男に八十町歩を與へ、二男三男に各十町歩宛を與へるとして、斯くすることが二代も三代も續いてやつて行けば、仕舞には甚だ少い財産のものばかりになる、即ち、



かういふ事になる、古來兵農の制度は此式で、事のあつた時には所謂本家が、其分家たる家子朗黨を率いて戰爭に從つた、彼の名和長年の如き、勤王の兵を起したのも、また其の分家たる家子朗黨を率ひて戰爭に從つたものであつた、然るに分家新屋を出すことが漸次財産を小ならしめ、家計を困難ならしむるのであるから、熊澤蕃山の如きも之れに反對したのである、だから馬鹿のことをタワケといふが、猥りに分家新屋

を作りて所謂「田分け」をすると經濟が困難になつて來るからうれで、分け卽ちタワケといふ言葉が出來たといふ事である、要するに斯の如きは徒らに小さき財産の者ばかりになるので、我國の如き小農國では殊に堪へ得べき事ではない。

文明國は大抵人口の增加する者で、我日本の人口增加は世界の三番目である、うして何れの文明國でも、其の增加する人口を處置する方法が付いて居る、英國には太陽が常に沒しないといふ程廣い領地がある、佛國も然り、獨逸も然りで、米國なぞは本國として廣い面積を持つて居る、白耳義の如きは小國でも亞弗利加の中央に、コンゴウ國を領して居つて、多い人間の遣り場所はチヤンとある、然るに日本は樺太は寒く、臺灣は暑く、朝鮮に移住するには多くの費用が要る、今迄盛んに住で居つた米國は日本人排斥といふ聲が八釜敷なつて來た、卽ち日本では此年

々增加する人口を處置する上に於て、實に八方塞りの境遇にある、近頃南米ブラジル移民に就て官民の相談會が開かれた、先づ第一着手として、戸數二千戸を彼地に移民せしむるとの事で、戸數五十戸を送れば此方の移民會社へ六千五百圓を寄越すさうである、うして移民が彼地に行けば、一戸に五町歩の土地を與へられ、道路も開き、鐵道も敷設して呉るといふ事である、日本は一平方哩に三百六十六人であるが、ブラジルに三人しか居らぬ、うれ故富源は極めて豊富であるが開拓されて居ないでブラジルに行つて居る日本の公使の畑といふ人が、此移民を募集する爲に各府縣に勸誘に廻つて居る、されば日本の農家の二男三男等は、宜しく移住すべき天地を發見して、獨立自營、以て將來の計劃を建つることが肝要である、之れは單に經濟上のみならず日本の人口問題解決上より見て、極めて重要な事柄である。

又、家内和合は支出を減少することを思ふべきこと、

一家の者の氣心がよく合致して居ると、うのすることなすことにムダがなくなるから、從つて支出を減少することになるのである。

儿、人格は支出を減少することを覺るべきこと、

人間が立派になると下らぬ費用が少くなるものである、凡そ人格はあらゆる問題を解決するもので、敢て支出問題のみではない、うれ故お互に此人格問題に就て最も考へねばならぬのである、私は世間の樣子を見て此問題に就て、大に警戒せねばならぬ事が澤山あると思ふ。

名古屋の附近では抹茶が非常に盛んで、一カドの紳士となると茶室が必要である、此茶には種々の流儀があつて其流儀々々には又宗匠と

といふものがある、之れが仲々八釜敷い事をいふもので、或處の成金先生が種々苦心研究して、茶室を作つたからとて宗匠に見て貰つた宗匠は立派に出來たといふたが、尚何か腹にありさうだので、主人が何處か缺点があるかといふと、宗匠はすかさず、イヤ茶室には、何一つ缺点は無いが、此茶室に比べて御主人が如何にも粗末であると云つたとの事であるが、大に味ふべき話であると思ふ、又私は此處へ來るに汽車に乘つて來たが、蒲郡の驛で二人の男女が乘つた所が腰掛が埃りで汚いので手巾でバタ〳〵腰掛をハタイた、私はうの時に自分が汚くて困るなら何故に周圍に居る人達にも考へを及ぼさないのかと思つた、此二人の如きは明かに人格の下劣を示して居るといふて差支ないと思ふ、まだ今仮りに其人の着物を貳百圓と見做すと、此人は體よりも着物の方を

大切がる人であるから、此人の身體の値打は正に貳百圓以下であるといふべきである、一体近來外見許り立派にする事が流行して、着物といひ、眼鏡といひ、看板やレッテルのみ飾つて、人格を重んじない風がある、人間が虚榮に走るのは人格が下劣に趣く証據で、人格さへ立派ならば虚榮などは一向不要で、從つて支出を減少することが出來る、名古屋の支那忠といふ旅館へ、嘗て乃木大將の奥樣が來泊せられた時に、其風彩が非常に質素なので、斯ういふ商買の常として四疊半位の小さなツマラヌ室に案内した、夫人はうれでも叮嚀に挨拶して居つた、所が風呂敷包みの中に軍服があつて、うれして番頭にいふたが、番頭は眞逆大將夫人ではあるまいと思つて居つた、然るに暫くして乃木大將が來られたので、始めて大將夫人であることを知つて、驚いて他の良い室に移られんことをお勸めしたが「此處で

結構だ」とて遂に移られなかつたといふ事で、旅館では大恐縮の體であつたが、大將夫妻は頓と平氣なものであつたといふ、此話を聞いても人間の眞價といふものは實に恐るべきものであると思ふ、人格がない人になると、外裝に大切な金をかけてセメて外觀だけなりと飾り度なるから、從つて支出が增大するので、支出の減少を冀ふものは、先づ其人格を立派にする事が最も肝要である。

第四章 農家經濟に關し注意すべき要点

第一節 念頭に置くべき二樣の區分

元來農家の經濟には二樣の區分がある、りして農家は先づ第一に之れに注意するが肝心である、卽ち、

一、家業經濟
二、家計經濟

之れで收支の記帳をするに當つても、計算をするに當つても、其家業に屬するものと其家事に屬するものとの區別を判然することが大切である、例へば生產費の如き、乃至は生產收入の如きも、共に家業經濟に屬すべきもので、生活費の如き、又は家事費の如きは、等しく之れ家計經濟に計上すべきが當然である、りして家業に屬するものは、經濟の方からいふと、主として生產方面の經濟で、家事に屬するものは主として消費方面の經濟である、我々は生產方面に於ては何處々々までも違算なきを期するを必要とし、消費方面に就ても亦之れを巧みにするでなかつたならば、折角の費用も使つた甲斐なしになるのであるから、大に注意せなければならぬ、凡て農業者は如何なる塲合にも、自分の業務に對

して常に少費多穫を目的とせなければならぬので、それが爲にはお互生産經濟に於て、大に心懸ける所がなければならぬ、之れに反して家事經濟は、消費を主とするのであるから、之れは少費多効を期せねばならぬ、農家は此二つの區別をせないと、其經濟は決して順調に行くべきものではないのである、世間に老農といふものがあつて、うまく百姓をやつて居る、或は米作りの先生とか、又は甘藷作りが上手とかいふて、自分も鼻を高くし、人も之を賞めるけれども、其老農が必ずしも財産を作らないのは、抑も何故であろうか、之れ彼等は大抵技術を主とする所から多穫といふ事は極めて上手に相違ないが、却説消費といふ方面の事になると、餘り多くを考へて居らぬが爲めで、從つて家政は兎角不如意となのであるといふて、大なる間違ひはあるまいと思ふ、卽ち我々は彼等に鑑みても、亦此經濟の二樣の區別を深く念頭に置いてかゝらなければ

ばならぬ。

それで目下農學校で敎へる所謂經濟學といふ書物は、凡て農業經濟學で、換言すれば家業經濟學である、而して家事經濟に關する事項をも詳しく說明し、示敎するものは一もない、我々は決して農業經濟學にのみ甘んずべきものではなく、農業經濟と家事經濟とを含む所の農家の經濟を、巧みにする事を考へなければならぬ、私は今の農學校其他に於ける敎育が、家業經濟の方面のみを敎へて、能事了はれりとして居る所から、百姓が上手になりながら貧乏になるのであろうと思ふ、經濟の先生が借金に苦しむといふ事も、折々聞く所であるが、之れも當然の事理であるとも思はれる、凡て事は一方に偏するといふ事は宜敷ないものである、私の知人に數學の先生がある、文部省の中等敎員免狀も持つて居る人で、現に四拾五圓の月給を取つて居る、前年細君を迎へられたが

四拾五圓の月給で樂に暮して行つた、うの内に子が出來た、けれども四拾五圓あれば如何にか暮しはついた、うの内に又子が生れた、親子四人となつて、此先生遂に暮し向に困つて來た、父は非常な財産家なので、此先生早速父の所へ手紙を書いて、貳參拾圓送つて呉れといふてやつたのである、すると父は其手紙を見て、手を拍つて頻りに判つた〳〵と云つて居つた、折柄其座に居合せた人が、其狂態は何だといふて訊ねると其父の曰く、私の年來の疑問が今初めて解けた、實に愉快だといふた、客は更に何だと追問する、父なる人は語を續いで「實は此手紙は私の枠の處から來たもので、枠は中學の而も數學の教師だ、處が親子三人の時迄は月給の四拾五圓で食つて行つたが、今度又子が産れて四人暮しとなつて月給だけでは食へぬから、貳參拾圓送れと書いてある、而し考へても見給へ、三人の時分に四拾五圓で暮らせたものが、四人になつたなれば、其四拾五圓を如何にすべきかといふ事は、比例で判るべきではないか、比例で豫め三人なら斯くすべし、四人ならば斯くせなければならぬと、豫算を立てゝやつたならば、何も貳參拾圓送れといふて寄越すにも當るまい、斯ういふ先生に教へられて居る日本の中學の卒業生が皆貧乏するのも、之れは當然であると今初めて判つた次第である」と話したとの事である、誠に面白い話で、多くの人に家計經濟の智識が足らぬのはこの話に明白である、彼の老農の財産が向上せぬのも、亦之れと同じ理ではあるまいか、之れ私が本章に於て、先第一に此二樣の區別を念頭に置くべきを述ぶる所以である。

第二節　勤儉の眞意義を解すべきこと

「勤儉産ヲ治メ」の文句は既に人々の耳に胼胝の出來る程聞かされた

所であろう、而も此の勤儉産を治めが一向現實にならぬのは何故であるか、蓋し多くの人が勤儉の眞意義を解せぬからである。

私は前節に於て家業の經濟と家計の經濟との區別を概說したけれども、其家業經濟は實に此の勤の一字にあるので、其家計經濟は又此の儉の一字に在る、卽ち勤は家業上に努むべき道で、儉は家計上に愼むべき途である、かくして初めて各人の財産は立派に治まることが出來るのである。

一、勤とは如何なる意味なりや

イ、不完全なる勤、

世人の多くは勤と云へば、卽ち「はたらく」といふ事に解釋して居る、何

が働くと云へば單に身體が働く事にのみ思つて居る、朝は早く起きて星を戴いて出で、晩は遲く月を踏んで歸り、更に夜業までする人を稱して勤勞家といふ人が多い、けれども之れは考へ物である、勿論此の如きも働くといふ部類には入るべきで、尊重すべき事柄には相違ないが、而しながら人間の身體の働きといふものは、一體ドノ位のものかと云ふ事も考へなければならぬ、所がうれは極めて僅少なもので、田を打つ事に於ては牛の三分一位、荷物を運ぶ事に於ては馬の何分の一といふ樣な譯であるから、身體の働きだけでは、人間は、如何に稼いでも、到底牛馬にも劣るといふ事になる、さりとて牛馬にも劣るから働かずに遊んで居るが良いといふ譯ではない、只身體の働きのみが、卽ち勤であると速斷するのは甚だしき間違ひであるといふのである。

口、稍完全なる勤、

我々は身體も働かせなければならぬ事も勿論であるが、更に添へて働かせる必要のあるものは智惠である。人間は此智惠と身體とで働いて初めて牛馬を凌駕することを得るので、又世間で云ふ働き損の草臥儲けや、稼ぎ貧乏もなくなるのである、さらば、其智惠の働き歩合は如何といふに、情けない哉日本人の智惠は働かぬ事夥だしい、尤も無い智惠は働かぬが當然で、又足らぬ智惠では碌な働きの出來ぬのが當り前である、されば故農家は常に自分より勝れて居る人の話を聞き、又は書を讀み、或は試驗もし、研究もし、其上調査もして、人一倍勝れた智惠を養つて其智慧を身體と共に働かせるでなければ、決して勤の字の光明は輝かぬのである。

ハ、完全なる勤、

更に又如何に智慧があり、如何に身體が強健で、朝夕よく働いても、其心が狡猾では効力は極めて少いものと覺らなければならぬ狡猾な人の働きは其人だけの爲になつて、從つて功德は小さく、一切の人に及ばない、故に働きの要素として、尚道德が加味せられなければならぬ、然るに日本人は之れも亦西洋人に比して、一向働いて居らぬ、人と共同もよく出來、公共の事業にもよく努力し、皆人の摸範となる事を得たならば五尺の小軀の働きと雖も、うの働きは只單に其人の家の爲のみならず、嚮ては村の爲ともなり、延ては國の爲ともなるのである。

此の體、智、德の三要素が常に同分量に働くでなければ、私は決して勤の字の解釋は充分であるとは云へないと思ふ、而して人間が巧みに働

いて信用を得るが爲には、實に此の眞の勤勞であることが必要で、三つの各要素の働かぬ限りは、未だ必ず勤の字の光明は強く輝かないのである、凡て信用の德は資本の融通を助くるもので、技術上には智を利用し、勞力上には體を活用して立派な事業に精勵したならば、必ずや勤の字の效果を完全に實顯することが出來るであろう、而るに遺憾な事には日本人の所謂働き手といふ人には、此三者を備へて居る者が少い、之れ勤勞の效果の分量に就て、各國民を比較するに、我日本人が毎に他の一等國民に及ばぬ所以で、お互が如何に戊申の御詔書を捧讀しても考を此處に輸すでなければ、眞に之れを捧讀したとも申せず、又其有難味に接したとも申せないのである。

二、勤を完全にする法、

若し夫れお互が一時に此三要素を得られぬといふのであるなれば、須らく一字なり、又は一村なりを探るべきで、さすれば必ず體の人と、智の人と、德の人とがあるものであるから、うの人達が集まつて互に結び合ひ相談し合つてやる樣にしたならば、恐らくは戊申詔書の實行の曙光となるであろうし、其處に一字なり、一村なりの立派な働き、立派な事業が生れるのである、而も日本人の惡癖として、體の人は徒らに智の人、德の人を罵り、智の人は體の人、德の人を嘲り、德の人は體の人、智の人とは互に伍せぬといふ有樣であるから駄目である、お互は一村一字が立派になれば、其惠澤は直ちにお互の上にも分配せられるものである事を思つて、先づ以て今述べた樣な方法を採る事にせなければならぬのである。

二、儉とは如何なる意味なりや

イ、儉とは長く役に立せる事

儉の字は勤の字より尙更に世間に誤解せられて居る、卽ち多くの人は儉とは使はぬこと、決めて居る、金でも物でも、其外何でも使はないのがこれ儉なりと思つて居る樣に見ゐる、之れ大なる間違ひで、若し果して使はぬが儉であるとすれば、世に死んだ人間程儉約家は無いといふ事になる、こんな事は一寸考へれば直ちに判ることで、之をしも誤解する樣では、戊申詔書の有難味は迚も判るものではない、一体儉とは使はぬ事ではなくて、使ふ事である、使ふ事といふと或は又誤解する人があるかも知れぬが、改めて誤解のない樣に言へば、長く役に立たせること

いふ事である、例へば茲に一本の鉛筆がある、之れを以て文章を綴り、又は聞いた事を記錄に留めるなどは、卽ち此鉛筆を役に立たせるといふ事で、短くなつたと云ふて捨てるのはうれは贅澤である、尙種々工風して筆の軸を上に箝めるなり、何とかして長く使ふが、卽ち之れ儉約である、故に聞いた話、書いた事を役に立つ樣にするは、一層の巧みなる儉約である。

ロ、體の儉約

人間で云ふと隱居が贅澤の骨頂である、うれ故人間は隱居すると幾何もなく死ぬのである、うれが若し身體を長く役立たせる事を考へれば、必ず長命すること疑ひない、千葉縣の銚子の町に仝といふ醬油屋がある、主人は岩崎明岳といふ老人で、彼の鈴木藤三郎氏の發明に係る日

本醬油に對抗して、在來の醬油の爲めに氣焰を擧げた、第一人である、元紀州の出で、百年前に銚子で醬油屋を始めた、家族は先代から今尙鄕里に住んで居つて、主人のみ銚子に出て營業をやつて居つたのである、今は息子に世を讓つて隱居せられたが、氏は決して世の常の隱居の樣に圍碁や活花の樣な道樂はやらぬ、毎日々々跣足になつて、庭へ出で矢鱈無性に自分で木の植へ替へをやつたり、飛石の置き替へをやつて居る、召使の者などは呆氣に取られて「隱居は此頃ドーカして居る」など蔭口叩くものもあつた、けれども氏は平氣の平左で知らぬ顏をして居るが常であつた、而るに毎日の植替だから木も堪らない、遂に葉の色が變になつて來て、一本二本と段々枯れ出した、之れを見ては店の者も默つては居られない、或忠義な番頭が氏に逢つて忠告した、所が氏の其時の返答は頗る明快で「實にお前のいふ通り、ボツ〳〵木が枯れ死ぬ樣だ、而し

木が生きる樣にして置くと此隱居が死ぬ、可哀想だけれども、俺の身體を保つため、木に犧牲になつて貰ふのだ」といふたとの事である、此老翁が前にもいふた日本醬油との對抗の時、息子に專心に本業をやらせて置いて自ら運動方面を引受け、東京に、京都に、大阪に、東奔西走して非常に活動したので、遂に勝を制したといふ事である、之れ等が人の身體を長く役に立たせる一例で、之れも亦實に儉約の一である、朝寢をしたり宵寢をするのは長く役に立たせぬ事で、不儉約な贅澤人である、儉約とは只單に物のみではない、以上の樣に人の身體の上にもある事を知らねばならぬ。

八、物の儉約

以前此縣に居られた李家知事さんが、燐寸の棒一本は白米十八粒に

相當すると云はれた様な事柄も考へて居らねばならぬ、美濃國の中津といふ處に、十一屋といふ同地第一の財産家がある、今より三代前の人が拵らへた財産で、其人は燐寸を使ふ毎に、新しい箱の軸木を古い箱の中に移して、新らしい箱は貯へて置いた、うして其溜つた空函を大八車に山の様に積んで、燐寸屋に賣りに行つたといふ人で、之れが眞の儉約である、米でも同じ事である、一日に一人で一粒宛粗末にすると、日本中では八石とか粗末になるとの事で、こんな事は役に立たせぬといふ方の甚だしいものである、御承知の金原明善翁は、汽車の中なぞで他の人が辨當を粗末に食つて、未だ折箱に飯粒が着いて居ると、うれを皆貰ひ集めて紐で括つて持つて來る、或時其折箱を持つて新橋の停車場へ降りて、銀座通りを平氣で歩いて、自分が頭取をして居る金原銀行へ行つた、金原銀行では行員は皆若手ばかり使つて居るが、若い連中は得て金

原翁のする様な事はやらぬもので、お互にツ、キ合つて「又頭取が乞食の様な眞似をして來た」と云ひ合つて「頭取にも困つて仕舞ふ」とコボシて居つた翁は之を耳にしながら、聞かぬ振りで頭取席に着たが、軈て時が過ぎて皆が歸る時分に、翁は行員を一室に集めて會食をして、扨て「此銀行の頭取は誰れだつたかナ」と奇問を發した、行員は呆氣に取られたが、誰云ふとなく「貴方です」と答へた、翁は隙かさず「うれならばお前達は俺に使はれて居る人だナ」と云ふた、すると皆が「勿論さうです」と答へた、翁は乃ち先きの折箱を出して容を改めて「さらばお前達に云ふて聞かせる事がある、先程私の耳に、頭取にも困つて仕舞ふといふ言が入つたが、お前達には此物を言はぬ辨當箱の不平を聞く耳は無いか、此箱に着いて居る飯粒は、洗ひ落して屋根に干して置けば雀の餌ともなり、之を地に播けば鷄の飼料ともなるではないか、此空箱は之れを洗つて保存

し置ば、何かの時には役に立つではないか、卽ち此箱にしろ此飯粒にしろ、未だ役に立たすればいくらでも役に立つのである、うれを捨てるのは、恰も働ける人間を免職にすると少しも異らない、今働き盛りのお前達を俺が茲で免職にしたなら、お前達は如何云ふか必ず頭取は眼が無いといふて、不平を漏らし愚痴をこぼすに相違ない、然らば何故其心を推し及ぼして此辨當箱の上に同情せぬか」と云ひ終つて更に翁は、日頃の温容となり「而しお前達は安心して仕事をしたがよい、此辨當箱を拾つて來る、私は決してお前達を免職する様な事はせぬ、只使はれるものと使ふものとの違ふ所を、能く味はつて貰ひたい」と諭したといふ事である、實にドーも涙の出る話で、行員も此の頭取の下には命もいらぬと云ふ氣になるべきである。

此金原翁と共に有名なのは江州の塚本定右衛門といふ人で、曾て功

に依つて、政府から藍綬褒章を下賜せられるといふ御沙汰のあつた時に氏は、私に呉れるなら、私の女房にも下さい、實は私が種々の事に盡力し得たのは全く女房が心から賛成して呉れたからの事で、私にお貰ひ申す資格があるなら私の女房にもお貰ひ申し度いと頼んだ、所が其節ではさうはならぬといふたので、氏はさらばセメテ御下賜の日には、夫婦同道で出頭を御許し下さいと願つて、縣廳に、夫婦して罷り出で、藍綬褒章を受けたといふ人である、其人が又極めて早起きで、毎朝起きると直ちに門口の掃除をやる、うして掃き集めた塵芥は、之れを木の枝、葉、馬糞類、石、土砂などに分類して、木枝や葉などは之れを擴げて乾かし、竈の下の焚き付けとする、馬糞類は之れを堆肥部屋に入れ、石は雨垂落に並べ、土砂は庭の低い處に置くといふ風に、小石一つも無駄にはしない、焚きつけなども年中買つた事はないとの事である、斯ういふ風で縣内で

も摸範人物と稱へられ、財産も地方第一である、而も亦公共事業には少しも金を惜しまず、人一倍の金を出すが常で、既に此の人の爲に出來た公園もある、卽ち氏の如きは公共の爲に儉約するので、金原翁が辨當箱を拾つて來る樣な半面に、濟生會へ五萬圓も寄附して知らぬ顏をして居ると同じく、眞の儉約家と云ふべきである。

二、時の儉約

世の中が段々進んで來ると、物の儉約以上に必要なのは時の儉約である、卽ち時を役に立たせる事である、元來物は一度無くなつても、亦再び求むることが出來るけれども、時間は一度失ふと二度とは得られない、之れ昔から一刻千金とか、又時は金也などいふ格言のある所以で、お互に一時でも無駄に過すと、再び其取返しが付かぬ事を心せなければならぬ、うして此取返しの付かぬ時間を粗末にせぬ樣、永く役に立たせる事が、物の儉約以上にヨリ大切であるといふ考へを持つでなければ何も出來る譯のものでない、文明國と非文明國とを比べると、時間に對する觀念に於て一番差がある、山中曆日無しといふて、文明に接せぬ所は時間に對する注意力が薄い、所が進歩して來るにつれて、時間を重んずるに至るものである、同じ日本でも軍隊であるとか學校であるとか又は汽車郵便などの樣に進歩した事になると正確に時間を守つて居るが、其外の事には一向守られない、此一事を考へて見ても、進んだ人物となつて、進んだ事業をなすが爲には、如何しても時間を大切にする考が必要である、我々が西洋へ行つて、一番嚴肅に感じたのは時間を格守することで、西洋では要用があつて人の家を訪ねる時には、双方時計を合はして置いて、必ず其約束の時間に訪ねるが、日本ではうんな事はし

ないうして彼地では午前九時に逢ふと約束がしてあれば、十分以上前でも失敬に當るし、十分遲れるとモー面會はせぬ、面會後も日本人の樣に、閑談だか要談だか判らぬやうな無駄談をしては居らず、要談のみを交換して袂れるといふ風で、此の如く時間を尊く考へると、仕事も必ず捗るのである、西洋では役所などでも、椅子は無く立つてる儘仕事をして居る、勞働者なども午前中に二十分の休憩が許されてあつて、其時にのみ煙草も喫めば話もするので、從つて日本人の樣に話をしながら、煙草を喫みながら仕事をして、遊んで居るのか働いて居るのか判らぬ樣な仕事の仕方とは、其効果が大邊に違ふのである、日本人の働き方がこんな風であるのも、畢竟時間を有益に使ふ觀念が足らぬからで、お互日本人は先第一に之れが矯正に努めて、物を大切にすると同時に、又何處迄も時間を大切にして、眞の儉約を心懸けねばならぬ、又講習や講

話などで考へると、話す人も聞く人も、双方共尙外に本職があるのであるが、其本業を一時捨て置いて話しもし、聞きもするのは畢竟本業の爲を思ひ、末の爲を念ふての事である、うれ故うの間の時間を將來に於て有効にする事を、お互に心懸けなければならぬ、然るに、一体日本人は聞いた事を實際にやらぬ弊がある、之れ日本人の事業が智識の割合に進歩發達せぬ所以で、所詮時間を無駄にするからの事である、時間を尊ぶならば其時間を活かさなくてはならぬ、其爲には聞いた事を實行するが第一要義である、うして自分の身の上及家業の上に役立たせるが肝心である、又經濟の上に適用して、之を發達せしむる爲に効力あらしめなければならぬ、我々は呉々も其聞いた所、知つた所を事實上に現はし農業も進歩する樣、家政の經濟も向上する樣、風儀も革まる樣するでなければ、遂に時程不經濟なものはない事になつて、文明人に對し誠にお

恥かしい破目に陷るであろう、殊に此時間を粗末にせぬ事、時間を役立たせる事、時間の効力を顯著にする事は之は、青年に於て特に最大切な事で、昔の人も「盛年重不來、一日再難成晨、及時當勉勵、歲月不待人」と云はれた、これは陶淵明といふ人の詩で、有名である、即ち一日に朝は二度は來ぬ、若い時は二度無いから一生懸命勉強せよといふのである、惟ふに青年時代は、頭腦の最も明敏な時代で、從つて人生中最も物覺のよい時代であるから、此時代に當つて大に勉強したならば、期せずして將來立派な人間になる事も出來るのである、所が日本人は若い時は二度無いといふ事はよくいふけれども、其次ぎが甚だ惡い、即ち或は飲むとか、或は買ふとか、或は打つとかいふ事が流行するので、若い時は二度ないから、此時大に修業しようとする青年は極めて稀な樣である、然し四十過ぎての道樂といふ事もある位で、道樂は四十になつても、六十になつても出來るものであるから、敢て青年時代にやる必要はないのみならず、青年の時に道樂するのは大なる間違ひである、西洋人を見ると、青年時代は非常に謹直である、日本人とは恰で反對で、道樂する人は妻帶した人に多く、修業盛りの青年にして酒を飲み、賭博をする者は一人もない、結局彼等は青年時代の最も大切な事を覺悟して、此時を逸しては、人間向上の好期は無いといふ事を知つて居るのである、之れ即ち時間を尊ぶといふ事であるが、日本の青年には此念なく、徒らに下等な方面の研究をやつて、つまらぬ遊びに耽る風がある、私は青年諸君に向つて、今に於て此弊風を矯め、以て時の大切なる所以を肝銘して之を儉約せられん事を切に望まざるを得ない。

本、心の儉約

更に大切なるは心の儉約である、一体心とは如何といふに昔の書物には面白い説明がしてある、即ち昔は心をコロコロといふたとの事で彼方此方と轉々するものであるといふことを意味して居る、今諸君は私の話を聞いて居る様であるが、一朝ソラ地震だ、ソラ火事だといへば話し處か下駄もはかずに飛出る者が屹度多い、之れ人の心が決つて居らぬ証據で、丁度盆の上に丸い球を載せた様なものである、所がうんなに轉つてばかり居つては、凡ての事は出來ぬといふ所から、後の人がコロと改正したので、更らに尚動かぬ様にと其上に石(口)を載せ、釘(一)を打つて、初めて忠といふ字が出來たのである、故に君に忠と云へば、親をも思はず、家をも思はず、又財産をも思はず、只一心に君の御爲をのみ念ふことの謂である、戊申の詔書に「忠實業ニ服シ」とあるは、農業者は農業に、官吏は官吏にといふ風に、心を散らさず、專心勵業すべき事を御諭し

になつたので、我々は其心が始終轉らぬ様にしなければならぬ、若し轉らせるならば役に立つ様に轉らせる事が肝心である、孟子といふ人は「學問ノ道ハ他無シ、只放心ヲ求ムルニ在リ」と云つた、放心を求むるとは、言ひ換へれば、精神の集注に努むるといふことで、佛教でも、日蓮宗で南無妙法蓮華經のお題目を唱へるのは、卽ち精神の集注を心懸ける手段で、大聲にお題目を唱へて居る間は、他の事は考へずに一生懸命である、眞宗は一に一向宗といふが、此一向といふことは、一方に向ふの意味で、馬車馬的の事である、禪宗でも座禪と云ふをやるが、之も精神集注の手段で、座禪をして居ると、線香の灰の落ちる音が聞へると云ふ事である、農業者も亦其業務に一心を傾ける事が必要で、それが卽ち心の儉約といふものである、心を一方に定めて眞一文字に進むことが出來ねば、凡ての成蹟は上るものでない、然るに今の人は此の心の儉約が出來ない、

一つの仕事をして居つても、他に儲かるといふ話を聞くと、直ぐ其方へ心が動く、農家の婦人が美服を纏ふて居るのも、要するに自己の農業者であることを忘れて居る爲で、こんな事の爲めに擧世滔々として、失費を多からしめるのは、畢竟心の儉約が出來ないからである、近來精神修養といふことが八釜敷いはれるが、精神集注といふ樣なことも、皆之の必要から來るものである、尾張國海東郡甚目寺といへば、有名な觀音樣のある所であるが、此處に舘助左衛門と云ふ老農が居る、此人は眞宗の堅い信心者で、極めて堅實な百姓である、明治初年秋葉樣へ參詣しての歸途に於て、土當歸を得て歸り、之が栽培に勤めたのを手初めに、野菜の栽培に盡力し、之が爲めに京都へ鞋ばきで、月に三回も往復して研究したと云ふ人である、近所界隈の人が其に做ふて作り出せば、之と競爭を避けて、他に何等かの作物栽培を工夫するのである、愛知縣に最も早く

煉瓦造の溫室を造つたのも此人が元祖である、今愛知縣では三階級の百姓があつて、上者は坪から貳拾圓を收入し、中者は畝から貳拾圓、下者は反から貳拾圓を收入すると云ふのであるが、此舘老農は其上者に位する人である、年は取つて今年七十の坂を餘程越へて居るが、尙栽培に、作物の選擇に、荷造りに、工夫と研究とを怠る暇がないのである、のみならず、其子息は縣下疏菜栽培者で三人男の中に數へる人で、全く助左衛門翁の敎化によりて出來上つたのである、されば今日では親子の協同で、收入も多大なるのであるが、而も家は小くて汚く、被服は粗末にして常に鞋ばき、食物は寧ろ粗惡に失する嫌がある、これで人往々、舘さんアナタは大分儲けらるゝのだから、家の一つも建てたなら如何ですといへば翁は之れでも、親が住むで居りましたと平氣である、これなら被服位は新調したら如何ですといへば之れまで風邪にかゝつたことも

ないとすましたものである、而も年々本願寺へは參百圓が壹錢も切れた事のない寄附をして居る、又公共への寄附も常に相應に喜んでして居る、嘗て伊豆の稻取村の經營者であつた、田村又吉翁が訪ねて往つて其の飾らざる、動かざる、迷はざる大安心の樣を見て、上には上のあるものかなと大に敬服して一夜を語り明かしたことがある、又內務省の神社局長法學博士の井上友一氏が、翁の堅信篤行に感じて會見を求め、淸洲の試驗場で會見した事があるが、井上氏が多年の篤行を感謝された辭に對し、翁は只何にも彼も皆佛法樣の御蔭でのーと云つたきり別に喜ぶ色もなく、誇る氣色もなかつたとりこで井上氏はこれぞ誠の眞人であると感服された事がある、又嘗て愛知縣農會で篤農家懇談會を催したことがある、當時會長が指命した老農は何れも自家の經營談をしたものだが、翁は壇上に座した切り（て話せしに）（皆は起立し）只へツへーと苦笑したのみで、無言の大演說をして、人を反省せしめた事もある、見るから一個の土百姓、話も出來ねば、書く事も、讀む事も出來ぬ、之れこそ田夫野郎の好標本としか思はれぬが、其の業務に忠實なる、其の職業を信じて疑はざる、而も些の衒氣なき樣は、眞に忠良なる農民の資であり、界隈の人に範を垂れ、常に人より事を前にして、敢て爭はざる態度は、眞に國家の寶たるの觀がある、世間には往々如斯人はあるが、兎角頑固に流れ易い弊のあるものであるが、翁は西洋種に就ては常に試驗場等に來て、技師技手の敎を請ひ、改良法を採るに少しも躊躇せぬは、日進の百姓たるに恥じないのである、如斯は、全く業務に對する忠實から、然るのである、其の落付のある勤め振り、其の樂しげに家族の立働ける樣、其の分を守つて他に求むる所なき、淸らかなる生活は、何人も感せぬ譯には往かぬ、斯ういふ人は世の中にいくらもあろうが、要は精神の正しく定まつてゐる人、

言ひ換へれば心の儉約家でなければ、決して出來ないことである。

要するに此の體と物と時と心との四つを粗末にせず、最もよく役に立たせる人が卽ち實際の儉約家で、此儉約が出來、尙體と智と及德とが遺憾なく活きて働いて、初めて一家の經營も出來、大なる事業も出來るのである、「又勤儉産ヲ治メ」の御聖旨に副ふことが出來るのであれば、何人も此勤儉の眞意義を解して、實際家業に又家事に努力せねばならないのである。

第三節　報酬に對し悟りを開くべきこと、

報酬といふものは、我々が働けば働く程多く得らるゝもので、之には元來二通の意義がある。

1、名義上の報酬
2、實際上の報酬

卽ち之れで、名義上の報酬といふのは、車夫が車を挽けば一日壹圓になり、百姓の日傭取りは六拾錢になり、月給取りになれば一日貳圓の勘定になるといふ樣なもので、今の人は是等名義上の報酬のみを考へて居る樣であるが、斯くては一面のみを考へて、他の反面を考へないものといふべきである、一体金錢のものは、言ひ換へれば名義上の報酬は、我々の慾望を全部滿足さするものではないので、只實際上の報酬を得んとする媒介に過ぎないのである、然らば實際上の報酬とは何ぞやと云に、之は要するに衣食住を滿足に得る事や、幸福な暮らしや、健康や、自由に在るので、始めより是等が充分に得らるれば、敢て以上の如き名義上の報酬を望まなくても良い事になる、例へば別莊を建てる人があるとす

ると、此別荘が實際上の報酬で、其別荘を建る爲に得た金が名義上の報酬である、然るに之を世間の人が考へないで、或は金持ちになつて憎まれたり、或は金持ちになつて殺されたりする人もあるのは、實に嘆はしい次第である、尾張の成岩といふ町に、非常に金を溜めて居る人があつた、尤も何も目的がある譯ではなく、單に金を溜めることのみに苦心して、高利を貸して居つた、然るに此人が昨年ピストルで殺され、家人までも人に憎まれて、今や居るに所がないといふ態である、哀れにも亦情けない狀態ではないか、兎も角試みに人に向つて金を溜めて如何すると聞いた時に、即答の出來ぬ人は名義上の報酬に憧がれて、實際上の報酬を考へて居らぬ人である、うれで名義上の報酬は、云ふまでもなく金である、然るに實際上の報酬は何であるか、言ひ換へれば東西を問はず、古今を論せず、何人にも共通の慾望は何であるか、うれは幸福と健康と趣

味と自由とである、金を儲けて不幸を欲せぬ者もない、私の方に金持があつて、主人が胃病で苦しんで居つた、或日乞食が來たので、下女が釜洗ひを吳れてやつた、稍腐敗しかけて居つたが、乞食はうれを旨さうに食つた、主人は之を見て大に羨んで、一生の間に今の身代全部を拋つても、一度あの樣に旨く飯を食つて見たいと云つたとの事であるが、實に面白い話であると思ふ、町の靑い顏色の人が、別莊を建てるが、あれはつまり保養場で、一種の病院である、然るに世の中に之れを羨む人があるが、心得違ひも甚だしいと云はなければならぬ、次に趣味も亦多くの人の欲する所で、例へば茶を飮むにしても、グルヽ茶碗を廻して啜る所に趣があるといひ、其の他庭園を作るも、音樂を奏するも、皆之れ趣味で、何れも人の欲する所である、而して尤も人の欲する、貴ひ者は自由で、束縛されぬ、檢束されぬ生活である。

此外にまだ人の欲すを所は種々あろうけれども、要するに是等のものを得て居つたならば、所謂名義上の報酬は既に得られた譯で、又仮令如何に名義上の報酬が少くとも、我々は満足すべきである、而も農業者は、他の業に比べると、此等實際上の報酬を最も多く得て居るもので、世の中に農業者程幸福なものはない、即ち人生眞の幸福は一家の和合に若くものはなく、どんな金持でも親子喧嘩や、兄弟喧嘩が絶へぬ様では、貧乏でも家内和合の幸福には遠く及ばない、商業家では家内が留守して家で物を賣つて居ると、主人は外へ仕入に行つたり、行商に行くといふ風で、夫婦は多く別々になる、工業も製糸工場などへ行けば、女許りだが鐵工場などへ行くと、男許りで矢張夫婦共稼ぎは出來ぬ、月給取などになると三百六十五日の内で、三度の食事を家族と共にすることは、稀で、如此は實に人生悲慘の極である、所が農業はさうでない、田を打つに

も、臼を挽くにも皆夫婦共稼ぎが出來る、語に、最も近きもの、最も遠き距りありとある通りで、目に最も近い眉毛が眼に見へぬかの様に、自身の體に最も近い自身は、見ることが仲々六ケ敷もので、農業に從事して居ると、農業の難有味は判らぬものである、ここが即ち迷の起る所で、お互大に注意を要するのである、如何なる國へ行つても、如何なる人の説を聞いても、農業程幸福なものはないといふ事に一致して居る、之れ農業は一家族が喜怒哀樂を倶にし、得る、からである、又た統計の上に現はれて居る所を見ると、農業者が一番健康で、徴兵檢査に合格する者も農業者が多く、長命の者も農業者に多い、趣味も亦農業者に限つて居るもので証據はイクラでも擧ることが出來る、即ち何時の時代でも、何處の國でも人類に於て、最も上等の暮しをする者は帝王で、人類中最も勝れて居る人は、偉人豪傑であるが、此帝王や偉人は何をして居るかといふに、

多くある職業の内で農業を選んで居る、畏くも日本の帝室でも新宿御苑では、園藝を經營され、又所々には御料牧場も設けられてある、又皇后陛下には御手づから蠶を飼はれる、英國のジョウジ五世陛下もキユーガーデンといふ園藝場を持たれて居るし、畜産共進會などの時には、下民と同様に牛馬を出品されて、共に審査をやらして居る、獨逸へ行つても同じ事で、伯林の近くのポスダムといふ所に矢張園藝場がある、米國でも初期の大統領ジョウジ、ワシントンなどは大統領を止めてから、ドゴへ行つたかといふと、矢張ワシントンの町から電車で四十分許りかゝる所に農場を設けて、そこで百姓をして死んだ、今尚其處に住宅と道具とが保存されてある、日本の西郷南洲なども議廟堂に合はずして、鄉里に歸つてからは芋を作つたといふ事だし、文豪トルストイも亦伯爵を捨てヽヤスヤナホリヤナで田園生活をして死んだ、近くは乃木大將

も那須野で百姓をやれた、斯ういふと如何にも我田へ水を引く樣に、都合のよい話をするといふかも知れぬが、實際農業でなければならぬから仕方がない、一國の帝王となると、いふまでもなく、國家の大權を握つて居つて非常な御心配があるがられも農業といふ趣味多きもので、慰められる、今上陛下は大邊盆栽を喜ばせられるが、之れも盆栽の趣味で日々の御疲勞を御慰めになるので、其他花畑の鮮かさ、累々たる果實を見れば、そこに直ちに慰安が得られるのである、如此帝王も偉人も好まれる處の趣味は、實に農業の專有である、英國の保護國にジヨホールといふ三十六方哩許りの國があるが、其國の王樣は宿屋營業をやつて居られる、けれごも苟も一等國の帝王となると、宿屋や呉服屋や八百屋などをやつて居られる、所は一つもない、而も農業は前述べた通り、何處の國の帝王もやつて居られるといふのは、實に此趣味がある

からの事ではあるまいか。

而して尤も貴く、尤も萬人の、欲する者は自由であろう、國と國とが競爭するのも畢竟之を確實にせんがためである、町村の自治を叫び、之を鼓吹するのも、自由の天地に導かんがためである、人が束縛されぬ、撿束されぬ、獨立自營の生活を欲するも亦之を得んがためである、罪惡を犯せば監獄に不自由な生活をせねばならず、貧乏すれば欲する物を得る能はざる不自由に陷らねばならず、義理を欠き、信用を失へば物の融通が出來ぬ不自由な身とならねばならず、如何に容貌が立派でも、風采が見事でも、位階等勳がいかめしくあつても、軍人や役人は上官の命令なくして、漫りに任地を離るべからざる不自由を忍ばねばならぬのである、只獨り恒産ありて義務の履行を欠かず、無理非道をせぬ農業家は、眞に自由の人である、世に食ふ事に困まらず、惡いことをせぬ百姓ほど、自由の天地を擅にするものはあるまい。

而して此自由此趣味及此幸福は、一体金で買へるものかを考へて見よ、彼の都の人達が或は拾萬貳拾萬の金を投じて、風景のよい所に別莊を造るのは、我々が無錢で得て居る此實際上の報酬、卽ち趣味健康及幸福を得んが爲で、お氣の毒ながらいふべけれ、百姓が之れを羨むに至つては、實にお話にもならぬのである、我々は之を哀れに思ふ位の見識を持ち、其悟を啓かなければならぬのである、其之れを思はずして、夫婦喧嘩をしたり、料理屋に出入をして、遂に財産を棒にふる樣になるのは洵に恰好の天罰ではあるまいか、私は前に收穫漸減率は吾々百姓にのみ課せられるといふ事をお話したが、これも我々百姓には以上の樣な實際上の報酬が與へられてあるからで、前にも話した通り、進んだ學理を基礎とし、進んだ技術を應用して、天の神に揶揄かつて、此漸減率をも破

るといふ意氣でやれば、農業者に對する、以上二樣の報酬は更に〳〵增大すること請合である、今日冷靜に世の中を見渡すと、大きな金持が皆農業に近付いて來て居る、三井や岩崎などいふ人が、農業の經營を始めたのも、要するに皆此處に悟りを啓いたからで、我々正銘の百姓は更に之れを念はなくてはならぬのである。

第四節　記帳、勘定、決算を大切に思ふべきこと

記帳もせず、勘定もせず、決算もせぬ樣では儉約々々といふても、何費目を儉約すべきか、何れの部分を改良すべきかといふ事が判らぬ事になる、之れ經濟の向上を計る上に於て、此等の諸項を忽にすべからざる所以である。

抑も記帳に就ては先づ帳簿の種類を知らねばならぬ、出來る事ならば左の六通を用意すべきである。

一、日誌　毎日の事件を記入す
二、現金出納帳　現金の收支を記入す
三、現物帳　現物の收支を記入す
四、覺帳　一時覺として記載し置くべきことを記入す
五、概況及財產臺帳　農場所在地の狀況、農場の一般狀況、經營者及家族並奉公人、財產目錄を記入す
六、決算帳　年度の終に各帳簿尻より拾集計算して記入す

古より一年の計は元旦に在りと云ふ事を云ふが、これは斯かる記帳をなし、一年の最後に決算をして見ぬ事には出來ぬ筈のものである多くの人がよく元旦に年內の計を立てるとの出來ぬのは、全く之を缺くからである。

勘定は一年拂、年期拂、月拂、週拂などあるが、田舍では多く年拂や、年期

拂が多い様である、之れ失費の多い原因である、なるべく溜まらぬ中にセツセと勘定することが大切である。

第五節　家長と主婦と同一意見なるべきこと

如何に家長が働き手でも、大事な主婦がおしやれでは、一向農家の經濟は順調に向ふものではない、之れ家長と主婦と同意見でなければならぬ理由で、家業の經濟と家計の經濟との兩方を、一人で旨く料理することは無理であつて從つて容易な業でないから、家業の經濟は主として家長に於て之れが發展を期し、家計の經濟は主として主婦に於て之れを預るといふ様に、二人で手を分けて心を協はせてやることが肝要である、當今農學校で農業經濟を教へて居り、女學校で家事科を教へて居るが、私は此の兩者を旨く統一し、連絡させる事にしたいと思ふ。

第六節　貯蓄心を涵養すべきこと

此貯蓄心といふことは極めて肝心な事で、今迄の話を逆に云ふことになるが、壹錢でも之れを貯蓄することにすると、自然と收支償ふて餘りある様になるもので、其餘つたものを又貯蓄するといふ事にしたいのである、尤も貯蓄には色々ある、目的貯金といふて、子供の敎育資金を得る爲めに、生後毎月貯金する者や、又は納稅を目的とし、婚禮費を目的とし、慈善を目的とし、或は資本を潤澤にするを目的とする等、卽ちこれで、何れにしても貯蓄の目的を明かにするは最も必要なことと思ふ。

　扨、それから貯蓄とは決して金のみにいふ語ではなく、品物の貯蓄も、亦忘れてはならぬ「今二宮」と人から崇敬せられて居る、秋田縣の石川理喜之助氏の如きは、夙に此處に心を止めて、日用品は凡て三ケ年の貯へが

なければならぬといふて居る、うして米も三年分は何時も倉に備へて置き、薪なども三年分はチヤンと貯へてある、面白い事には其薪で家を取り廻いて墻壁の代用となし、一方から使用して他方から補充するといふ風にして居る、支那人の言葉にも、國に九年の貯なければ、之れを不足といひ、六年の貯へなければ、之れを急といひ、三年の貯なければ國にして國にあらずとあるが、之れ又實にお互の心懸けを要する所で、殊に水害地などでは更に必要である、多くの人の中には、金さへ貯蓄すればよい樣にいふ人もあるが、此の如く物を蓄へる事も決して閑却すべき事柄ではない。

第七節　收支に確固たる目的あるべきこと、

此收支の目的を確固明瞭ならしむることが私に云はせると、豫め大に考へなければならぬ所の最も重要なる問題である、寧ろ第五章の經濟の根本義といふ題下に說くべきが至當かも知れぬが、今は此章に於て說明して見たいと思ふ、卽ち何が故に、收入を得るか、何が故に支出をなすかといふ事を、各農家は知らなければならぬといふ事で、若しも之れが明かになつて居らぬ場合は、折角の收支も却て或は自己を損ひ、人を害するといふ結果に立到らないとも限らない、世には隨分收支を無意味にして居る農家が多い樣であるから、特に注意が肝心である、金持になると道樂をする樣になるとか、息子に馬鹿が多いとか云ふ事はよく聞く事であるが、之れ所詮收支の目的が不確實から來る結果である、といふを憚らないで私は收支に對して、然らば吾々農家は如何なる目的を以てすべきかといふことに就て、左に其の要概を述べて見やうかと思ふ。

一、收支の目的は人格家格の向上に在らなくてはならぬ

人格は必要である、されど如何にお互が人格々々といふても、冬の寒空に浴衣一枚で震へて居つては始まらない、人格の光を輝かすには、多少の金を要すべきはいふ迄もない、明治天皇陛下の御大喪儀の當日に、町村長が之れに加はる者極めて少かつたといふ原因は、實に燕尾服といふ禮服がないからの事であるが、農家でも燕尾服の一着位は買つて着れる樣にせなければならぬ、又家格を立派にするに就ても、相當の設備が肝要で、あの家は古い家で由緒あり、歷史ある家であるがと云はれても、公益慈善に對して一向冷淡では、家格は決して向上するものでない、又我々は此公益の費用として、餘程は出せる樣にしたいと思ふ、要するに金品を儲け、金品を使ふは人格家格を維持し、向上するを目的とすべきで、今の人間の樣に金を溜めると人格を壞し家格をも潰す樣な事では實に困つたものと思ふ。

二、收支の目的は有益公共事業の發展に在らなくてはならぬ

農家は又此項目を頭に置かなければならぬ、卽ち農產を多くするは畢竟國家及自家の爲に有益事業であり、それが爲には資本も多く要するから、收入の增加を心懸けるが必要で、重い負擔にも堪へて、凡ての方面に遺憾なき支出をなす爲にも、亦收入を增加せなければならぬ事にもなるものである。

三、收支の目的は廣き意味に於ける社會人類の向上に在らなくてはならぬ

世界の一等國と云はれて居る國へ行くと、世の中が非常に便利になつ

つて居るが、其裏面には金が多くあるといふ事が、チヤンと伏在して居るのである、交通が便利で、又動物園もあれば植物園もあり、圖書館もあるといふ樣に、總ての社會的設備が整つて居つて、社會も人類も依つて以て向上するのである、之れも金がなくては出來ぬ事で、又公德が進んで居るといふ半面にも、必ず常に金を必要とするのである、文明國では汽車の定員といふものが決つて居るが、日本ではうれさへ不明である、日本の停車場では、只一枚でも切符を多く賣りたいといふ事にのみ考へて、旅客の便不便といふ事は多く顧みない、從つて日本の汽車には立ン坊があるが、西洋の汽車には立つてる者は一人もない、切符を買ふ時に席を約束することも出來るので、乘れば直ぐ其約束濟の所に腰が下ろせる譯で、何れにしても立ン坊する樣な心配はないから、日本の樣に先きを爭つて乘る樣な事をせずとも良い、之れ西洋に混雜のない

所以であるが、日本で汽車に乘る時や、切符を買ふ時などに甚だしい混雜を見るのは、之れ皆設備不整頓の罪である、西洋のは設備もよく、速力も早し、回數も多いから自然と混雜もなく、公德も進むといふ事になるので、之も皆金の光である、故にお互に收入を增加するにも、亦支出を巧みにするにも、常に社會人類の進步向上を目的とせなければならぬので、此目的が明かであれば決して他を損ひ、自らを害する樣な事は、したくも出來るものではないのである、然るに日本人の成金黨は、斯ういふ目的を立てぬ爲に、少し金が出來ると、ヤレ別莊とか、ソレ道具とか、又は金の指輪とかいふ方面に費されるが普通で、其結果が直ちに社會に奢侈、贅澤の惡風を流すに至るのである、西洋と日本と、其文明に著しい徑庭のあるのは、西洋人は金に依つて人格、家格、村格、國格の向上を圖り、社會人類を益するけれども、日本人は全く之れと反對で、却て害毒を流し

て居るからの事である、日本人には又金を溜めて出さぬ人がある、之れを堅い人といふて居るが、堅いものは脆いものであると悟なければならぬ。

之れを要するに、我々お互は以上述ぶる様な目的の下に収入し、以上述る様な目的の下に支出する事が、其經濟上最も肝要な事柄である。

第五章　經濟の根本義

第一節　經濟は道徳を基礎として立たねばならぬ

經濟とは前にも話した通り、收支相償ふて餘りある様にするのであるが、其後屢々話した様に其經濟をうまくやるには、只單に農業者ならば農作物を上手に作り上げて、それをうまく賣つて、金儲けをするのみでは駄目で、更に其得た所の金の支出を上手にせなければならぬ、而して其間には色々の道徳上の辨へもなくてはならず、又一つの信念もなくてはならぬので、經濟といふも、決して獨立すべきものでもなければ、又獨立して出來べきものでもない事を覺らなくてはならぬ、換言すれば經濟は道徳を基礎として立つべきもので、二宮翁の報徳で、經濟と道徳とは相須つものであるといふと同じく、此二者は綯ひ合せて繩の様にならねば、世の中の事は何事もうまく行くべきものでない事を辨へなければならぬのである、故に經濟を進めるには、道徳を進めなければならず、道徳を進めるには、又經濟を進めなければならぬといふ關係になるので、狡猾で出來た經濟は永く順調を保たず、貧乏人には仁義あれども行ふ能はずで道徳が出來ぬ、而るに今の世の中は經濟々々といひ